

アルヴヘイム・オンラ
イン ～Another side
of 「二人の黒の剣士」
～

風来コタロー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アルヴヘイム・オンライン、それは、妖精が紡ぐ幻想譚。

これは、アルヴヘイム・オンラインで「死神」の二つ名で恐れられる一人のプレイヤーの物語……

*この作品は、ジャズ氏の作品「ソードアート・オンライン〜二人の黒の剣士〜」の三次創作作品です。

元にした話「ソードアート・オンライン〜二人の黒の剣士〜」 五十話 《幕間》
現実の話。

目次

Ops. 05 「スライムと希望と置き
去りにしたもの」 | 81

Prolog: 死神の名を冠する少年

1

Operation of Girls

Side

Ops. 01 「天使の指輪」 | 18

Ops. 02 「黒の剣士に憧れた者」

30

Ops. 03 「三人寄らば……いや五

人だね」 | 47

Ops. 04 「お節介は英雄の本質」

61

Prolog：死神の名を冠する少年

ここは、アルヴ Heim・オンライン、現在デスゲームで話題となっている S A O、ソードアート・オンラインが発売されてから一年後に発売された、妖精卿の世界と言うファンタジーな世界観で在りながら、PK（プレイヤーキル）が推奨されていると言う、正直に言わせて頂ければ結構なハード設定な VRMMO である。

プレイヤーは九つの妖精種族に分かれ、ALLO の中心にそびえる『世界樹』を目指し、そこにいる妖精王『オベイロン』に謁見して上位種族『アルフ』に生まれ変わることがゲームの大まかな目標だ。

だがこのゲーム、リリースから約一年経った今の今までその目標をクリアした者が出ていないと言う前代未聞のゲームであると言う点が、この世界のハードさを難易度的にも設定的にも拍車を掛けている証でも有るわけなただけ……

しかも最近は各種族にとんでもない実力者が乱立し始め、群雄割拠の妖精戦国時代状態となっているやばい状況なわけでもあるわけ……

そして、そんなファンタジックでハードな妖精の世界で今日もここに、夕焼けの空を駆けるプレイヤーがまた一人――

「インプ領首都 アメジスティア」

アルヴヘイムの時間は夕方近く、山岳地帯に囲まれた暗がりのインプ領の首都は夜に近い時間と言うこともあり、アメジストが輝く紫色の光で彩られた街に人が賑わう中、インプの特性である暗中飛行を使って、外に続く洞窟に向かって飛ぶ一人のプレイヤーがいた。

「インプ領 上空」

「side Calm」

「さて、久々にログインして空に出てみれば、いいねえ。綺麗な夕焼けじゃないか……」
紫色のインプ領首都とは打って変わった、燃えるような橙色の空を飛翔しながら、目の前に燦然と輝く夕日を眺めていると、僕の視界から光が現れ、やがてそれはこのアルヴヘイムではシルフ領主のあの人を着ているような着物に身を包んだ小さな妖精となつて顕現する。

「しっかし、随分久しぶりにログインしたんじゃないか？ おまえ」

「お、こつちだと久しぶりだね、シキ」

「あのなあ、オレはおまえがいなくて出てこれないんだからな？ 結構退屈だったんだぞっ」

「ああ、まあね、最近ほんつとに忙しかったからさ……ごめんよ？」

こっちはリアルが忙しかったからねえ。色々致し方ない部分もあったんだけど。

そんな僕に語りかけている彼女の名前はシキ。とある事……いや、縁と言った方がいいか。そこから僕の相棒となったプライベートピクシー……なんだけど、どうやら色々事情があるんだよね、知った時はびっくりしたとも。加えて彼女の存在が僕のとあるスキルにも関わってるんだけど……まあこの辺りはおいおい話そう。そして改めまして、皆々様に自己紹介と参りましょう。

僕の名前はカーム、このアルヴヘイム・オンラインではしがたいインプ族の1プレイヤーとして――

「「「見つけたぞ!! 『死神タナトス』だ!!」」」

……やれやれ、自己紹介もさせてくれないのかい？

「相変わらず、面倒事に巻き込まれる体質だよなおまえは、一旦オレは引っ込んでくぜ。正直久しぶりに出てこれたから戦いたいけどな?」

「戦闘衝動は抑えてシキ、確かに君も戦えるけどね? ひとまず今は隠れといて。――やれやれ、全く、久々にログインしたばかりでまだ不慣れだというのに、君たちは相変わらずだね……」

そういう僕の目の前にいるのは、サラマンダーのプレイヤー、数えて20人程……まあサラマンダー領とインプ領って隣同士だから、もしかしたらそれでばったり出くわ

したパターンかもしれないけど……そんな希望的観測を祈っていたら——
「お前の首には賞金がかかっているからな、倒しておくところちの懐的にも名誉的にも色々得だからよお！」

そういって、サラマンダーのゴロツキめいたプレイヤーが僕に一方的に語りかける。あ、この感じ間違いない。こいつら賞金首狩りだ。しかもさつき20人程って言ったけど、あれって、賞金首狩りで組めるパーティメンバーの上限じゃない？ さつきの自分の予想が当たってしまった事に嘆息しながら、あちらさんの様子を見る。敵の編成は指揮官が一人に片手剣三人両手剣三人、それ魔導士十二人……と。

そしてこの男が語った「僕の首にかかっている賞金」というのは、最近このALOに実装された、「賞金首システム」なるものが関わっている。

僕個人で調べてみたんだけど、このシステムは、領地毎に強さが目立ったりしたプレイヤーに「賞金」がかけられ、それを倒したプレイヤーにユルド（ALO上のお金）が付与されるというモノらしい。

そしてかけられたプレイヤーも賞金稼ぎで敵対したプレイヤーを倒した分だけポイントが与えられ、それを自分のユルドに換算できるとい感じ。

賞金首を倒したプレイヤーには倒したという名誉が、賞金を掛けられたプレイヤーはそれをかけられるほどの「強者」の証ということなんだそう。

それで僕も、このシステムで賞金首になってしまったわけなんだけれどもね。そしてついた二つ名が「死神タナトス」。なんとも物騒な名前である。まあ僕の戦闘スタイルを鑑みれば、まあこの二つ名は妥当というか……

ちなみに僕の他だと、「不死身の槍兵」、「影の国の女王」、「竜の魔女」、「ブリュンヒルデ」、僕の知り合いだと、「蒼き隻腕」とか……それと今はこの世界にはいないけど、「星海坊主」もいたら多分すごい賞金かけられたんだろうなあ……後は、花の魔術師とかいうあのグランドろくでなしプーカかなあ。もしかしたら今でもどっかでこの状況をのぞき見してるかも知れないけど。何とは言わないけど、七色のあの子とは大違いだよ

……

ろくでなしシステム

閑話休題

まあ他にもこの賞金首システムには色々仕様があるみたいだけど、今は割愛させてもらおうよ。それよりも、この状況を切り抜けないとね。

System—Announcement

『賞金首「死神タナトス」との戦闘を開始しますか?』

▶YES ?

NO

さて、あちらさんのウィンドウが出てるってことは、そろそろ来るかな?

「この人数ならさしもの死神でも——お前ら、かかれえ!」「うおおおおお

おお!!!」

!!

ごろつきめいたサラマンダーの掛け声とともにサラマンダープレイヤー達が襲い掛かる。先頭の大剣持ちのプレイヤーがイノシシのように突っ込み、それに追従するように他の剣持ちプレイヤーも突貫してくる。かなり動きが早い。だが！

「いい動きしてるけど、それ故に単調になりやすい……よねつとー！」

そう言いながら、敵さんの動きを回避する。次から次へと連撃の嵐が吹き荒れる中を、ひらりひらりと風に舞う木の葉のように避けていく。

「ええい、つかみどころのない奴だなアイツ!？」

攻撃をかわしていく姿を見て、ゴロツキサラマンダーが愚痴をこぼす。

「いやまあ、僕ってそんな奴だし?！」

そんな風にごろツキサラマンダーに言葉を返しつつ、迫る無数の凶刃を回避する。

「戦闘中に敵と話すとは、余裕綽綽って感じか!? 死神い!？」

「あのねえ、余裕綽々って君たちは言うけどこれ単に武器を取り出す暇がないからこういう状況なのであって、ホントはもっと色々やりたいんだよ!？」

実際あのウインドウ出現から敵の突撃までの動きが早かったせいで、こちらの準備がまだ整ってない。だからこうやって敵の攻撃をヒュンヒュン躲しまくるしかないって感じなんだけどね！

というかアレ、僕のステータスの問題で食らったら終わりなレベルの攻撃だから、そ

もそも一撃でも食らうわけにはいかんのよ。実質オワタ式なんだよね……おこわ。

「そうさせないように俺たちはこうやってるんだろう——がっ!!」

「うわっ?!? 危ないじゃないか?」

大剣プレイヤーの大振りを空中でバク転しながら回避する僕。危うく当たるところだったじゃないの。

「結構良い剣筋してるじゃないか? その大剣のプレイヤーさん?」

「死神にそう言われるとは、俺もまだまだ捨てたもんじゃねえ感じか?」

「かもしれないね?」

言葉を交わしたその後に、僕はようやくやく剣を取り出す。抜き放たれた剣は夜の闇を具現化した艶めきを帯び、黄泉の冷気を纏ったかのような剣気を放っていた。

「剣の銘は『ニユクス』。さて、反撃開始といこう……ん?」

僕は抜き放った片手剣を体の横に流すように構える。周囲をプレイヤーに囲まれながら、正面に立つ大剣プレイヤーと対峙しようとする中、ふと彼の表情を見ると、その口はしてやったと言うように不敵な笑みを浮かべていた——まさか。

そう思い彼の後ろを見ると、魔法詠唱の声と光が聞こえてくる。そして魔法を唱えるプレイヤーの中心に立つゴロツキプレイヤーは先程の大剣プレイヤー以上の不遜な笑みに表情を歪ませていた。

「なるほど、近接攻撃は囷で、あれが本命ってわけかい……!」

「その通り!! いくら死神でも、これだけの魔法は捌ききれないだろう!」

ゴロツキリーダーが魔方陣を背にしながら高らかに言う。あの魔方陣からして、結構高位の魔法みたいだね……恐らく最高位火属性魔法メテオ・エクスプロージョンが5発×5セット、それに高位火属性魔法ブラスト・フレアが10発×10セットか。確かに、純粹威力でだけなら火属性は魔法の中でもトップクラスだし、しかも加えて火属性攻撃上昇バフ付きという。なかなかどうして殺意満々だねえ。いやまあ、こつちを殺す気であつちは向かつてきてるわけなんだけど。

というかいつの間にか、僕を囲っていたプレイヤー達が全員あつちへ退避しているし……僕が焼かれる様を高見の見物ってわけかい?

「さあ、死神は消毒だあ!!!」

世紀末の火炎放射のモヒカンの如きセリフと共に、蹂躪の炎は放たれた——

「直死、起動。」、『我が剣に滅亡

の光あり!」——

side Third person

大規模な魔法が着弾した余波により、辺り一面が煙に包まれる——

「魔法、着弾しました!」

大量の魔法が炸裂した煙が晴れた中には、カームのリメインライトが残っているものかと思われたが。

「あれだけの魔法なら、流石に死神でもひとたまりもないだろう……」「か、カシラ！ あれ、アレ!?!」って、ナニイ!?!」

「ふう……何とか間に合ったかな?」

そこに在ったのは、全くの無傷でそこに立つカームの姿だった。

「オイオイオイオイ、最上位魔法とそれに次ぐぐらいの強力な魔法だったんだぞ? それを無傷って、いったいどうやってたらそんなことが出来んだオイ!?!」

「こっちも流石に死にかけたよ……これが無ければまず間違いないやられてた」

そう答えるカームの瞳は——青白い光を纏っていた。吸い込まれるような青に虹色の光が輝くその瞳は、まさに「魔眼」と呼ぶにふさわしい形相だ。

「お、お前! その目は何なんだよ!? んでどうやってあの魔法を無傷で切り抜けやがったんだ!?!」

青ざめた顔でゴロツキサラマンダーがカームに問いかける。

「これかい? まあ一言で言うなら、『死神を死神たらしめる理由』の一つ、かな?」

「ああ?なんだよそれ!?!」

「なんというか、色々殺し続けた証明ってことらしいね、僕も正直このスキルについては

鋭意調査中なんだけど、何をしたかを一言で言うなら、「魔法を殺した」ってところかな？」

「魔法を……殺したあ!？」

「この瞳ははちよつと特殊な代物でね？ 名前は「空式・直死の魔眼」からしき。なんでも「死の概念」が見える状態ってシキは言ってたけど……とにかくそれで魔法の概念を殺したのさ。だけど眼で魔法を視ただけじゃ魔法は殺せないから剣を使っただけど、ただ魔法に対して剣を振るうと耐久値的に剣がもたないから、ちよつと剣に色々付与したのさ」
軽妙な口調で答えるカームの剣の刀身には、白と水色を混ぜたような不思議な輝きを纏わせていた。妖美な煌めきを放つそれは、人の叡智が生み出した傑作とも、或いは世界の理から外れた混沌をもたらすモノとも言えるだろう。

「二つ聞きたいんだけど、君達って、『魔法を混ぜる』ってことをやったことはあるかい？」

「いきなり何言ってるんだあ!？ んなもんやったこともねえよ?」

「今は無き「あの剣の世界」と違って、この妖精の世界には魔法があるけど、考えたことはないかい?」「この世界の魔法は、いったいどれだけあるんだろう」ってさ?」

「あ? んなもん、火、水、土、風、闇、光の6つだろ?」

「正解だゴロツキ君」「ゴロツキ君ってなんだよ!」……ゴホン、ともかく、僕はそれを興

味本位で全部混ぜてみたんだよね」

悠然とした態度でカームは剣に纏わせた光を指さす。

「そしたら、これが出来た」

「ああ？ それがなんだってんだよ？」

淡々とした口調でカームは説明する。

「名付けるなら『メギドの光』。効果は「対象の属性耐性を無視した魔法ダメージ」。とはいえ剣に付与するのはあまり安定しないし、これももうすぐ消えるから安心してもらえれば。まあこの魔法の本当の仕様はこんなもんじゃないし、というか使いすぎるとシステマ的に色々不味いからあまり使いたくはないんだけどね……それに魔眼も出しっぱなしは体力減るから今はOFFにしとかないと……」

カームが説明を終えると、彼の眼と剣に纏っていた光が消失した。

「属性耐性無視イ!? なんじゃその魔法!? チートかよ!？」

「いや、実際にあつたんだからチートではないよ……多分」

「オイ多分ってなんだ!?! というか魔法を殺せるとか、んなおつそろしい事やらせる前にこいつが先にお前を倒しちまえば早えだろ!?! 構えろお前ら!」

ゴロツキのリーダーがやられる前にやれと言わんばかりに部下に指示を出す。

「まあ確かにそれは得的を得ているね。そんな魔法殺しとか、させる前に倒せば早い。だ

けど、僕の二つ名が何故つけられたか、覚えてないかい？」

「ああん？ そりゃあ——死神……だよな？」

「ああ、その通りだよ。つまり、「僕が殺せるのは魔法だけじゃあないし、それにこの魔眼を使わずとも、君たちを魔法で殺すことは、出来るってことさ……！」

〈 side Calm 〉

さつきの相手さんの魔法全力ブツパが、僕の心に火をつけた。あれだけの魔法を見せてくれたんだ、たつぷりお礼をしてあげないとね？ さて、先程魔法を混ぜて色々出来たと僕は語ったが、なにも僕が創ったのは「メギドの光」だけじゃあない。ではここからは、僕がああ光に至るまでに編み出した魔法の数々を今、ここに御開帳と行こうか……!!

『舞うは風、奏でるは、災厄の前奏曲也……!!』

まず詠唱するのは風属性＋水属性をかけ合わせた魔法。その詠唱と共に、空に雲の塊が顕れ、サラマンダー達の周囲を渦巻くように風が強く吹き始める。

「なんか俺たちの周りだけ風やばくなって来てませんかカシラ？」

「たかが風だろ？ そこまで気にするもんでもないだろうが？」

「しかし、周りだけ風を吹かせて俺らにはダメージ無しって、外したんですかね？」

まああの魔法はあくまで風を吹かせるだけ……しかしこの世界において、「風」がどれ

ほど恐ろしいか、あいつらは知っているのかな？

「たかが風でも、侮ることなかれ……ってね？」

そうほくそ笑みながら、次の詠唱の準備をする。元素を渦巻かせ、それを形にする。属性は炎と風、創り上げしは焰の竜！

「カシラ、そういえばこの風、俺たちを閉じ込めるように吹いてますけど……」

「ええい、こんな風ごとき……ん？ 近接攻撃班、なぜあいつに向かつていかない？」

「……わかってやっているんだったらあの死神相当クレバーだぞ……この風は、牢獄だ……!!」

この魔法の真の目的は、相手の行動を封じること。さっきの相手の魔法攻撃を避けるために近接攻撃してたサラマンダーが散開してその後ゴロツキリーダーの近くに戻っていたんだけど、そこを突かせてもらった。広域行動制限魔法、名付けて『ストーム・プリズナー』！

『燃え上がるは焰、嵐と共に龍よ登れ！』

続けて放つは炎魔法と風魔法を掛け合わせた呪文。まあ、自然界でも風で炎は強く燃え上がる現象は実際に存在するだろう。原理自体は単純、それ故に強大。敢えて名付けるならば……そう。

「吠えろ、『勇炎龍咆』!!」

ブレイブドラゴン

咆哮と共に飛び立った炎の竜が、サラマンダーが閉じ込められている風域へと飛び立っていく。そしてこの魔法の名前は気にしないほしい。正直名付けた自分が玉に恥ずかしくなるツツ!

「じゃあなんでそんな名前つけたんだよ……」

「今は突っ込まないでシキ! 戦闘中だから! でも強いて言うなら……ノリ!」

「やれやれ、おまえの感性、時々わからなくなってくるよ……」

シキに呆れられてしまったが、こういう魔法に名前を付けたくなるのは、誰だって経験することでしょう? つまり、そういうことさ……!」

「だがなあ死神、たかが炎属性如き、俺達サラマンダーに効くと思ってるのか?」

あのゴロツキの言う通り、いかに炎属性を風魔法で強化しているとはいえ、相手は炎属性をメインに使うサラマンダー。おそらく炎属性の耐性はあるだろう。

「それは知っていたよ。だからこそこうやってとぐるを巻かせたってワケさ……!」

「つて、カシラ、あの炎が乱気流に乗ってこつちを囲ったせいで視界がゼロですよ!」

真つ赤です!」

「なんだとオ!?! チイ、あれはただの囷かあ!!」

そのとおり、あの龍炎はあくまでも目くらまし、さつきこつちがされた事の意趣返し、果たさせてもらうよ……!」

『其は数多なる者を斬獲せし滅亡の光也、炎雷風地を円環へ捧げ、闇と光を渾沌に帰し、今其の神罰を此処に示さん』

さあ、その名を高らかに告げよう、これが僕が生み出した最後の切り札。^{L A S T W O R D}

「さあ、終わりにしようか」

『メギド ラオン』

先程の「メギドの光」を攻撃魔法として昇華させた、僕の最後の切り札。その本質は、「その光を受けた相手の防御値をゼロにして、超特大のダメージを耐性、反射といったあらゆる効果を貫通して与える」魔法。僕が嘗て憧れた、某ドラゴンを倒すクエストの魔法のような、「息の根を止める」といった文字通りの即死というわけではないが、魔法を混ぜるといふ興味本位から出来た「ダメージを与える魔法」で限りなく即死の領域へと近づけた最高の切り札……！

放たれた滅亡の光は、炎の嵐に閉じ込められたサラマンダーを丸ごと飲み込み、世界を白く塗りつぶしていく――

やがて魔法が消え世界が色を取り戻した時、その爆心地に残っていたのは、サラマンダーの赤いリメインライトが二十、チロチロと弱弱しく燃えているばかりであった……

「戦闘終了つと。ふう、やっぱり久々にコレ使うのはすつきりするなあ……」

「お疲れさん、相変わらず清々しいまでの威力だな、それ。跡形もねえぞ？」

「まあ、その分MP使い果たしちゃって正直休みたんだけどね……流石に魔法連続詠唱はしんどいね。ホント」

「そーいや飛行制限は大丈夫なのか？」

「まだまだ余裕だよ。戦闘も一段落した事だし、というかあの炎の竜巻でなんだか暑いし……そうだ、アイスクリームでも食べようか。あの冷たい感じ、今のこの状況にはピッタリだと思わないかい？」

「どういう発想でそこに行きつくんだよ……ともかくオレはストロベリー……じゃなかった、ウンディーネ領特産ウォーターベリーアイスクリームでいいぜ」

シキが呆れながら、しかし少し興味ありげに答える。にしても普段はクールでダウナーな感じで通してるシキだけど、アイスの事になると目が変わるよね。隠しきれないよ？

「シキ、いつつもその味ばかりだよ……まあいいや、じゃあ、ウンディーネ領に行くとうちしようか？」

そうして僕たちがウンディーネ領へ飛翔しようとしたとき——
『カアーム!! あなた、今どこにいるの!?!』「うわあ!?!」

いきなりそんな大声が聞こえてきた。ああびつくりした……

「この声、どうやら、歌姫さんからお呼び出しみたいだぜ？」

「そうみたいだね。『はいはい、それで、何か用があるのかい?』」

『今日は央都アルンでシャムロックの定例会議よ!』 あなたはめつたに來ないから、今日は絶対参加するように前から言ってたでしよう?』

『そういえばそんなのもあったね。まあ僕の事だし多分寝てて聞いてなかったけど……』

『全く、あなただっていつもそんな感じよね……とにかく、央都アルンのシャムロック本部に來ること、よくってね?』

『OK、すぐに向かうから、待っててくれるとありがたいかな、セブン』

僕がそう答えると、通信は切れた。

「どうやら、ウンディーネ領特産ウォーターベリーアイスクリームはまたの機会みたいだね……はあ、僕もアムリタソーダシャーベット、食べたかったんだけどなあ……」

「ま、央都にも美味しいアイスはあるだろうし、そっちで手を打つぜ?」

「はいはい、わかりましたよ。それじゃあ、行こうか?」

そういつて、僕達はこの妖精の世界の中心、央都アルンへと飛びたつていくのであった——

O p e r a t i o n o f G i r l s S i d e
O p s . 0 1 「天使の指輪」

暗い昏い闇の中、僕は一人足を止めず。

その足取りはふらふらり、あてもなく虚ろに影は歩む。

生霊のように、あるいは亡者のように、空っぽなボクを満たしてくれるものをさがす
為に。

——いつからだだろう、あの虚しい歩みの夢を見るようになったのは。

ラフィン・コフィン笑う棺桶が無くなった時？ あの殺人鬼が欠片となって消えたとき？ いいや、なん

てことはない。あれは僕がボクになる前、僕にとって唯一だった両親を——

く A L O 央都アルンく

く s i d e C a l m く

央都アルン、アルヴヘイム・オンラインの世界の中央に位置する巨大な世界樹である
ユグドラシル、その根元を囲うように存在するこの世界最大の都市。そんな央都のとあ
る宿の一室にて、僕ことカームとシキは取り留めもない会話を繰り返していった。

「リングオブエンジェルウイスペア」
「天使の指輪？」

「噂で聞いただけなんだけどね？ なんでも、指輪を交換した人同士だけが一か月に一度だけ声を送りあえるようになる指輪がスヴァルトアールヴヘイムに実装されたんだとか……」

「それで？ オレにそのクエストについてほしいってことか？」

「そういう事。行けそう？」

「パス」

「だろうと思った……」

プライベートピクシーではないプレイヤーの状態の、紫の着物に赤いジャケットを羽織ったシキは自分の得物であるナイフを手入れしながら僕の頼みをスパツと断つてきた。とまあこうなることは予測はしていたんだけどもね……なんせ興味のないものに対しては基本めんどくさがり、例えるなら猫みたいなシキの性格からして、あーいう実用性ない感じのものは興味ないだろうし……

「そもそもなんでオレを誘ったんだよ……メドゥーサを誘えばいいんじゃないのか？」

「彼女は今日は「静かに本が読みたいので」ってシルフ領の大図書館行っちゃってるからいないんだよね……」

メドゥーサっていうのは僕の仲間のプレイヤーの事だ……一応。彼女とはとある成

は宴で盛り上がると言われているからね。死んでも蘇るって点はリスポーンが出来るALLOに合致している。かつてのあの世界と違ってね。

「……………これかな？」「天使の指輪」クエストは……………」

「なるほど、場所は浮島草原ヴォークリンデのあの周辺か……………一応サイトで調べておいて正解だったかな、このアイテムは必要数揃ってるみたいだし」

最近この世界に実装された新エリアであるスヴァルト・アールヴヘイム、僕が所属してるギルドである「シャムロック」はこのエリアの最速攻略に躍起になってるみたいで、ギルドリーダーでありこの仮想世界で歌を歌うアイドル的な存在になっている「セブン」——リアルでは「仮想世界の光の研究者」なんて呼ばれている七色・アルシャーピンのファン（まあありていに言えば信奉者）の証である白い羽飾りをつけたプレイヤーをスヴァルトエリアの様々な場所で目にするようになった。まあ僕は持つてはいるけどつける必要はないからつけてはいないけどね。

——とまあそんなこんだで回想というか説明の様なナニカをしてる間にこつちもクエスト情報も整理した時……………」

百合と薔薇とツツジの様々な花の匂いが混ざったような幻想的で少し甘さを感じる匂いが、微かに僕の鼻腔をくすぐった。VR世界の嗅覚エンジンもなかなかの性能だなと内心で感心しつつもこの忘れもしない特徴的な匂いのため息をつきながら振り返る。

そこには白いフード付きのローブをまとった、紫水晶色の瞳をした銀色の長髪の青年が立っていた。足元からはなぜか花のような光がぼわぼわと輝きを放ち、そのいでたちはまさに、「物語の魔術師」を体現するかのようだ。

「おい、あの白いフードのプーカって……」

「間違いない、「花の魔術師」マーリンだ……!!」

「それにあの濃紺色のマントのアイツ、「死神タナトス」のカームじゃねえか?」

「嘘だろ、賞金首二人がそろってやべーだろそれ!」

周りからもざわめきが広がる。それもその筈、こいつもまた僕と同じ「賞金首」に指名される実力を持つプレイヤーであり、「花の魔術師」と呼ばれ畏怖される存在であるからだ。

「やあやあ死神くん、そっちは元気にしていたかい?」

「そっちこそ、相変わらずうさん臭さが過ぎるねグランドろくでなし?」

「グランドろくでなしとはなんだいグランドろくでなしとは。私はただ私が気に入った『うつくしいもの』の行く末を見届けただけだよ?」

「その為の過程で色々やらかしてるのは知ってるんだよ、そういうところがろくでなしなんだよ、全く……」

彼の名はグランドろくでなしことマーリン。うちのギルマスのセブンと同じプーカ

と言う、全体的なステータスが他の種族よりも低いわけだ。得意なことが楽器演奏と歌唱という戦闘や探索においてあまり使われず、不人気というか不遇に近いものがある。この種族で、なぜか歌わずゴリゴリに剣振るったり魔法をばりばりに使って戦闘を行い、ALO黎明期においてプーカにも関わらず様々な魔法戦闘のスタイルやシステムを確立させた功績から「花の魔術師」の二つ名を与えられた、ある意味セブンとは真逆なプレイスタイルを貫く二つの意味での変態プレイヤーだ。

「ところで、今日はどうしたんだい？ 君の歌姫は今傍にはいないのかい？」

「今日はギルドはお休み、セブンもリアルが忙しいからログインしてないんだよ……まあ、信奉者達はうちのセブンの為にファーストランナー目指して頑張ってるみたいだけども」

「まあ彼女は研究者として忙しいのは容易に想像できるからね。しかし君はシャムロックの一員、ひいてはシャムロックの中でもあのスメラギ君と同レベルの実力者なのだろう？ シャムロックの為にクエストをしないのかい？」

「グランドロクでなしの口から、ある意味僕のシャムロックでの立ち位置を問いかけるような質問が飛んできた。この男、こういう心理的な面でおっそろしいまでの洞察力があるからなあ……」

「僕はシャムロックの為というより、単純にセブンが心配というか、ほっとけないんだ

よ。なんとというかセブンからはこう、「寂しがってる雰囲気」を感じるんだ……」
 「寂しがってる、ねえ……」

「ああもう今はそういうのはいいでしょ、他人のプライバシーにずかずか入ってくるんじゃないよこのろくでなし」

「まあ確かに、こんな話はここでするべきものではないからね。さて、私もなにかクエストを受けるのでしょうか……？」

そう言うともーリンはクエストカウンターの方へと足を運んで行った。ふう、ひとまず一難は去ったか……さて、一息ついたところで。

行ってみよう、リングオブエンジェルウィスパ天使の指輪!!

く浮島草原ヴォークリンデ 天使のバラ庭く

さて、クエストボードに示された場所に行ってみたところ、その天使の存在を知っているNPCに遭遇。ひとまず事前に用意しておいたアイテムを見せると、それがクエスト進行のキーだったのか、NPCにこの花が咲き誇る庭園に案内された。そして件の天使様とご対面……のはずだったんだけど。

「なんとということでしょう。本当に乗り越えてきちゃったんですか、うざーい」

「……ええ」

「まさかこれくらいで「絆」なんて不確かなものを信じてもらえるなんて思っていないよねー？ はい次ー『打ち捨てられし塔』に住まう魔獣を倒してきて、そしてさっさとあたしに「絆」とやらを見せつけてみなさいよ、はーりあーつぶ」

天使、にしてはなんだか物凄く擦れてませんかこの人、一体どうしたんだろうか………なんというか、思ってた天使と随分イメージがかけ離れているっていうか……

「コレジャナイ感がハンパジャナイ……」

僕の思う天使つてもつとこう、清楚で可憐で儂げな………そんな感じをイメージしてただけど………おかしいな？ 目の前の彼女は儂さは確かにある。だけど、こう………清楚の欠片もないというか、なんというか………あまりにも擦れてませんか？

「ふーん、この妙にやさぐれた天使、それにこのクエスト名………なるほど、そう言う事つてわけか」

「あれ、シキ？ 来ないんじゃないのかい？」

「別にいいだろ、ついていきたくなくなったからついてきた、それだけだ」

うん、この気まぐれつぶりはいつも通りかな。そんなプレイヤー状態のシキの様子にいつも通りの安心感を感じながら、シキに問いかける。

「とうるか、シキ、そういう事ってどういう事？ このクエストに何かあるのかい？」

「あの世界のクエストそのままなんだよ、このクエストがさ」

あの世界のクエスト……？ それって……

「SAOのクエストだったのこれ？」

「ああ、オレも一度受けたことがあるんだよ、SAOのクエストにはこういう妙なクエストがたくさんあってさ、これもその一つってわけだ」

「……なるほど」

あの世界にも僕が知らないものが色々あったけど、このクエストもその一つってところか。

「それでこの天使なんだが……まあご覧のとおりやけに擦れてるっていうか……なんでも人間様に昔裏切られたって設定らしいぜ？」

「へえー……」

人間に裏切られた……ねえ。

「さて、そろそろ行こうぜ、天使様も早くしてほしそうにこつちを見るぜ？」

「……ナズエミテルンデイス!？」

「いや、急かしてるだけだからな？」

「何を言ってるのよあの妖精は……早く倒してきなさいよ」

オンドウル語で返していたら天使にまで呆れられてしまった。うん、言ってる場合じゃないなこれ。

そんなことを思いつつ打ち捨てられた塔へ向かおうとすると……

「おい」

「ん？ どつたのシキ、呼んだ？」

「いやオレじゃねえぞ？」

え、それじゃあ誰が……まさか。

「天使さん？」

「……気を付けて、行ってくるがいい」

なんと天使がなんだかつーんとした調子ながらもこちらを心配する言葉をかけてくれたのだ。もしかして……そんな疑問を抱いた僕はシキに問いかける。

「なあシキ」

「こんどはなんだよ？」

「もしかしてあの天使、意外といい人？」

「さあな」

シキはめんどくさそうに返答する。それにしてもこの天使さんの感じ……いわゆるツンデレというやつなのでh——

「つかか！ 言うと思ったかばーか！ ばーか!! ば——か!!」

「……」

顔を真っ赤にしながら罵倒の言葉だけを残して、天使は消えていった……うん。

「あの反応、ツンデレ通り越してもはや子供だね……」

「やれやれって感じだな」

二人してため息をつく。しかしこの妖精の世界にも、あの世界の残滓がいろんな形で残っているんだね……

「これはオレの憶測だが、なんというか、人間に裏切られてから妙に人間っぽくなっただけ感じがするんだよな、あの天使」

「まあ、人間と関わったって言うのが、彼女に良くも悪くも影響を与えたのかもしれないね……」

ちよつと……いやかなり僕の中での天使のイメージが彼女で上書き保存されてしまったというか……S A O のクエストは、なんだか癖が強いというか……よし、気を取り直してつと。

「さて、あの天使さんを待たせないようにしないとねシキ」

「そうだな……お前の事だ、こういうヘンテコクエストも楽しんでいくんだろう？」

「もちろん、なんだかあの天使、好感度的なものがある気がするんだよね……！」

「なんというか、そういう探求心の強さはお前らしいよな……オレはしばらく休むから、こっからはどうぞソロでお楽しみくださいってな」

「りよーかい」

そう言い残すと、シキはプレイヤーからナビゲーションピクシーの姿になり、僕の胸ポケットに潜るとそのまま眠り始めた。

「……もしもの時には頼りにしてるよ、シキ」

胸ポケットで眠る小さな死神の頭を指で撫でつつ、いざ向かわん、『打ち捨てられし塔』へ！

さて、なるだけ早い事攻略したいところだけどちよつと突入前に最後のかくに……
「ん？　なんだ？　塔の方から戦闘音？」

遠くから剣戟の快音が響く。もしかしたら先に指輪クエストを受けている人だろうか？　ちよつと様子を見てみようか——

——そして僕が目撃したのは。

巨大な獣ウエアフルフ人を相手にたつた一人で相対する黒衣のプレイヤーの姿。二つの剣を得物にし、敵に怯むことなく縦横無尽に空を舞うその姿はまさに。

「——黒の、剣士？」

僕がああ剣の世界で憧憬を抱いた、かの黒の剣士、その人だったのだ……！

O p s . 0 2 「黒の剣士に憧れた者」

Side Calm

「——黒の、剣士？」

その手に携える二振りの剣で、狼顔の巨大獣人に突撃する黒の剣士……なんだよね？
なんでこんなところに彼がいるのか……はわからないけど、とにかく真つすぐに、果敢に、そして愚直に飛び込んでいく姿をこの目に焼き付ける。

対する狼巨人はそれに対抗するように咆哮を放つ。竜の息吹の如き強烈なそれは、眼前に迫っていた彼の突貫を食い止めた。——ってうっさ!?! 奴さんとの距離ははそこそこ離れてるはずなのに、ここまで余波が……!

「……っ!!」

咆哮を受けてノックバックする黒の剣士。

「——キリトさん!?!」

む？ 彼に注目していて気が付かなかつたけど、どうやら他にもプレイヤーがいたみたい。彼が後ずさった手前を注視すると、そこにいたのは青い衣のツインテケモ耳ケツトシーと、金色の長髪をポニーテールに纏め、白と薄緑を基調にした衣装を纏ったシル

フのプレイヤー、そしてピンクのくせつ毛に赤いエプロンのような装備を着けたプレイヤーの驚愕する姿があった。というかあの三人全員女性プレイヤーってどういう事ですかね……VR世界の女性人口はそう多くないはずなんだけどなあ……

——つて、内心苦笑いしながら、偵察を続けていたら。

「ちよつと、アレどうなってるのよ!？」

「なんでキリト君がこんなところにな？」

「どうなってるのかよくわからないですけど、とにかくキリトさんを助けなきゃ……!」
状況が飲み込めない様子で黒の剣士を助けに向かおうとする三人の少女たち。

あの黒の剣士と三人のプレイヤーでパーティを組んでいるのかと思っていたが、さっきのセリフから察するに、どうやら黒の剣士がソロで戦っていたところに三人のパーティが通りすがったという認識が正しいかな。というか彼女達、黒の剣士の事を知っているようだけど……もしや君たち、お知り合い？

「さて、僕も黒の剣士の窮地をただ見ているだけってわけにもいかないよね……!」

まあ、今しがた浮かんだ疑問は置いてだね……目の前のこの状況をこのままただ傍観しているだけって言うのは面白くないし、何より、ここがあの世界じゃないとはいえまた目の前で誰かが死ぬ光景を目の当たりにするのは御免被りたいから……!」

ウインドウを開き武器を選択。先ほどまでの戦闘観察から整理して、あの敵の巨大さ

なら素早さ重視でいつもの片手剣「ニユクス」を使いたいところだが、さっきの咆哮ブレスで黒の剣士がぶっ飛ばされたところをみるに、奴さんのパワーは相当のものと推測。だったら……!」

だったら選び取る武器はあれしかない……! 僕の掌に光が集まり、得物が形作られる。それは僕の二つ名でもある「死神」を死神たらしめる大鎌だった。

見つめると魂が吸い込まれそうな程の純黒の刃は降り注ぐ仮想の太陽光をギリりと跳ね返し、死をもたらす者の得物として相応しい形相を見せてくれる。——その銘は『不死殺』しなすごろし。

「準備万全。よし、それじゃあ行くとしましょうか!!」

三人のプレイヤーが走り出したと同時に、僕も様子を見ていた岩場から飛び出す。飛び出した僕達に黒の剣士も気づいた様子だ。情報がごった煮になってそうだけど、緊急事態ってことだからね、許してくれたまえ。

「え、ちよつと、あんた何者よ!」

三人の内のピンク髪のプレイヤーさんが疾走しながら僕に尋ねる。そりやあ唐突に出てきたからね、驚くのも無理はない。

そして走行速度を緩めることなく、そのままの勢いで返答した。「通りすがりの死神さんだ、覚えなくてもいい!」

……恰好づけたつもりだったが、思いつきりダダ滑りしてしまったようだ。なんか目の前のピンク髪の子がチベットスナギツネめいた表情でこっち見てるし。「つて、んな事言ってる場合じゃない……!?!」

「ちよつとあんたそれつてどういう——」

彼女達と僕が飛び出してきたのがトリガーだったのか、狼獣人が空に向かって咆哮したと同時に、無数の黒い光弾がこちらに向かつて流星のように降り注いで来た。範囲攻撃魔法——奴め、僕と黒の剣士共々まとめて全員吹っ飛ばそうつて魂胆か!

「やばっ……!?!」

ピンク髪のプレイヤーの驚愕した声が聞こえる。けれどこの程度の弾幕、あの時の魔女の炎に比べれば——

「どうつてことは——ない!」

斬つて、弾いて、振り払う。降り注ぐ無数の凶星を、その手に握られた大得物でバツチバチと弾いていく。

とはいえ、さつきどうつてことはないかと強がつてみたものの、やはりこの弾幕の量を僕一人だけで弾ききるのは無理がある。時折弾ききれなかつた弾が至近弾となつてこちらにかすつたりもする……というかなんか焦げた匂いがするんですがそれは。だが今はそんなことを考えている場合じゃない。

「……シッー」

僕が弾き損ねた弾は黒の剣士が対処してくれてるみたい。いやはや何とも、フオローのありがたみが身に染みる……よし、これなら……！

「この弾で最後ッ……！」

最後に放たれた流星を巨人の顔面にホームラン。ベイス★ボール。最後のキメ球をそつくりそのまま返された事にカチンと来たのか、巨人がこちらに注意を向け始めた。ヨシ。こつからはこの間に即興で考えた作戦を決行に移すとしよう。

「こつからは僕があいつを引き付ける！ その隙に頼むよ、『黒の剣士』！」

「……！」

僕の呼びかけに黒の剣士は軽く頷きその出番を待つ。……む？ どこことなく彼の動作に違和感があったような気がするけど……今はどうでもいい。

深く、深く。己を律するように一呼吸。落ち着け……戦いはこれから。ここからが僕の舞台。呪文を囁むなんてもつての外。一つ、一つと囁みしめながら。歌うように、奏できるように呪文を紡ぐ。

かつて、スパルタの王レオニダス一世は、後に伝説として語られることになったテルモピュライの戦いにおいて、わずか三百の兵を持って、侵攻する十万人のペルシャ軍に立ち向かったという。この技はその戦において先陣に立って立ち向かったレオニダス一

世が発揮した力を、僕なりに複合魔法で再現したもの——その燃え上がるかの如き祈りは、死神に「誰かを守るための力」を与えん——!!

「——スキル起動、炎門スバルタン、フライドの矜持おおおお!!!」

静まり返った戦場を切り裂くような、普段の僕じゃ出さないであろう雄叫びで自身を奮起させ、その身一つで巨人と対峙する。その叫びに反応したか、狼巨人も完全にこちらへ意識を向けたようだ。よおし、順調順調つと。視線が交叉する。そして、僕は狼巨人に掌を向け、煽るようにクイクイと動かす。——さあ、かかって来いよワンコ君？
こっからは、この「死神」が相手をしよう……!!

↳ side Lisbeth

「あのキリトじゃないほうの黒いフードのヤツ、あんな大得物でどうしてあんな細かい動作が出来るのよ……」

「リスさん、あの黒いフードのプレイヤー、そこそこALO歴が長い私から見ても相当の実力ですよ……?」

目の前で繰り広げられる激しい戦闘に、思わず息をのむあたし達。先ほどの叫びから端を発した黒フードのヤツが狼巨人の攻撃を全て引き受けているのだ。しかも巨人の攻撃の大体をあの大きな鎌で受け流し、受け流せない攻撃はひらりと回避するという、回避盾の役割を完璧にこなしている。その回避盾に引き付けられている間に、二刀流の

キリトが攻撃を叩き込むという寸法ね……あの二人、出会ったことないはずなのにコンビネーションばっちりじゃない。

— とうかさつきシリカがキリト達の助力に行こうとしたけど、それをあのキリト？

本人が遮ったおかげで行ける雰囲気ではない。けどただ見てるだけ……なんてあたしの性分に合っていないし、今黒フードが仕切っているこの戦況にどうにかして加わりたいが、あのとんでもない攻撃はあたしたちが飛び込めるような隙なんてものはない。それに何より……

「あの黒いフードの人、私達を守ってる？」

— 一連の動きに気づいたらしいリーファが言う。あの黒いフードのヤツ、キリト？ を攻撃から遠ざけるのが目的だと思っていたが、どうやらその後ろのあたし達も守っているみたいだ。現に、時々流れ弾のように飛んでくる攻撃も、全てあたし達に当たらないようにしているからだ。

それにしても鎌とはいえ、あんなに大きな得物を振るう黒い剣士を見ると、あたし達の知り合いの「もう一人の黒の剣士」の事を思い出す。そいつは今あの黒いヤツと一緒に戦ってるキリト——いや、あたし達にとつて、彼はキリトとおなじぐらいに、あの世界で私達を引っ張ってくれていたヤツだった。でもあの黒いフードのアイツには、なんとというか、アイツとは全然違う、むしろあたし達のような「引っ張られる側」に似

た雰囲気をしていた。見栄を張っているとはまた違うけど、なんだろうか……

「それにしても、あの人……」

シリカがふとそんな言葉を口にする。——それがきつかけだったのか、戦局が大きく動いた。今の今まで回避盾の黒フードに傾いていたヘイトが、キリトの方に移ったのだ。

「くつ、流石にヘイト稼ぎも限界か……!? 攻撃——来る!」

黒フードのヤツが悪態をつく中、今までのお返しと言わんばかりな狼巨人の渾身の一撃を、キリト? は左手の黒剣を使い、完璧なタイミングで弾く。パリングする大技を弾かれたことにより狼巨人が怯み、その動きが鈍重になる。

「タイミングばっちり! これなら追撃も入る!」

リーファが感嘆の声を上げる。そして。

「うおおおおおっ!!」

雄叫びと共に、キリト? が巨人に連撃を叩き込んでいく。袈裟、逆袈裟、左薙、右薙、上段。その黒き剣舞によって無数の傷が巨人の体のあらゆる箇所_に刻まれていく。そして彼は右手に持つ純白の剣を肩にかけ、弓を引くように引き絞る。すると、剣に深紅の光が満ち始め、周囲にジェット機のエンジンじみた高音が響き渡る。それは、「黒の剣士」が最も愛用したらしい片手剣単発重突進技『ヴォーパル・ストライク』。

「これで——終わりだっ！」

正中一閃、巨人の心臓に穿たれたレッドホール。その紅蓮の弓矢の如き一撃によって、巨人は地へと倒れ伏せたのであった。巨人が無数の結晶片になり空へと消えていく中、あたし達三人は武器を背中の剣帯にしまうキリト？ に声を掛ける。

「あの、かばってくれてありがとうございます」

シリカのお礼の声を聞いて、彼が振り向く。

「いえ、こつちこそ反応が遅れてしまって……皆さん、怪我はありませんでしたか？」

「まあ、おかげさまで……」

返事を返しながら、キリト？ をじつと見つめるあたし達。それにしても容姿や服装は本当にそっくりだけど、纏う雰囲気や話し方からして……うん。

「やっぱり別人みたいですね」

「まあ、普段キリトは二刀流使わないし、戦い方も違ったものね」

普段……と言うよりは余程の事がない限りキリトが使わないであろう二刀流を使っていたこともそうなのだが、よく見たら持っている剣が左右逆（SAOで例えると、右手が黒い剣のエリユシデータ、左手が白い剣のダークリパルサー）だったのだ。けど、あの廃人ゲーマーなキリトの事だし……

「あいつの事だし、新キャラ作って何かやってたりして……」

「いくら何でもそれならこんな似た姿にはしないかと……私たちにモロバレですよ」
「それもそうね」

ふと口にてたあたしの疑念を、リーファが否定する。

「……えつと？」キリトに似たプレイヤーが、何が起きているかわからないような表情で言う。

「あつすみません、私たちの知り合いにあなたが凄く似ていたものですから」

声を出したキリト似のプレイヤーにそう答えるシリカ。実際、この黒のプレイヤーの容姿は、種族や武器、装備など、何から何に至るまでキリトにあまりにもそっくりだったのだから、あたし達も最初は見間違えたものだ。

「ホントにね、キリトの奴がまた何か無茶してるのかと思っただけど、違つてほつとしたわ」

「キリトつて……あなた方は『キリト様』を知つて……？　もしかして、『SAO生還者』サブバイパー……ですか？」

「さ、様づけ？　というか、君も……？」

キリト似のプレイヤーの様づけ呼びに、何故かその隣にいた黒フードのプレイヤーが反応する。つて、なんであなたが反応するのよ？

「あ、あなたも!?　というかさつちの黒フードの人も生還者!?」

黒フードのプレイヤーの言葉に、かなりびっくりした様子のリーファ。

「そういえば、あんたもあたし達をかばってくれていたのよね。一応礼を言っておくわ」
「礼を言われるほどじゃないですよ、僕はただ、憧れの『黒の剣士』が傷つく姿を、見ていられなかっただけですから」

あたしのそんな言葉に黒フードのプレイヤーが大鎌を背中に懸架しながら整然と答える。なんだかちよつとカッコつけてるわねこの黒フード……

「まあ、結果人違いだったけどね……でも、戦闘センスはなかなかのものだったよ、偽物が本物に劣るなんて道理は無いってよく言うし」

「ど、どうも……そういえばあなたもキリト様を知っているんですか？」

「ま、僕はあの背中を見ていただけで、最前線で戦っていたわけじゃあないんだけどね……それに、黒の剣士は「キリトだけじゃない」からさ」

「へえ、ジエネシスの事も知ってるのねあんた」

「暗黒の剣士と黒の剣士……あの人達の信念は誰よりも大きいモノだってことは知っているんで」

そう静かに語る黒フードのプレイヤー。彼が見上げるアルプヘイムの蒼穹は雲すらない無い快晴で。彼の瞳は何処か遠く、その蒼空に今は無き鋼鉄の浮遊城を幻視するかのようだった。

「ところで、あなたのそのキリトさんっぽい格好って、意図的に似せているんですか？」
「あついえ、俺のこれは意図的というか……ひとまず歩きながら話しましょうか」

シリカのふとした質問に、キリト似のプレイヤーがすこしあわあわしながら答える。

「僕もついていかせてもらっていいかな？ クエストは道連れ、世は情けって言うし」

「いやそうは言わないわよ……」

「まあ、強いプレイヤーがついてきてくれる事に何の損もない訳ですし！」

「そうですよりズさん！ こんなに頼れそうなプレイヤーですし！」

「まあ、それもそうね」

「ありがとう、恩に着るよ」

シリカとリーファの提言でなぜか黒フードのプレイヤーもついてくることになったところで、キリト似のプレイヤーが語り始めた。

「最近、このALLOにスヴァルト・アールブ Heim エリアが実装されたのを知って、新しくALLOにキャラを作ったんです」

「なるほど、他のゲームでもこういうのあるわよねえ」

「確かに、このエリアの実装がきっかけでALLOを始めたっていう人もたくさんいるって、あたしも聞きましたし……」

「そうしたら、登録時のランダム生成でこの姿になったんですよ。SAO完全解放の英

雄、『アインクラッド四天王』の一角、『キリト様』と似た姿に！」

キリト似のプレイヤーはその瞳を輝かせながら答える。

「俺、個人的にあの強さに憧れてましたし、なんだか天啓みたいなものを感じてしまつて、つい装備も似たものを……」

「そうだったんですか」

少し照れながら言うキリト似のプレイヤーに、シリカが微笑みながら答える。

「それにしても驚いたわね……『SAO生還者』があたしたち以外にもALOにいたなんて……」

「そんなに珍しい事なんですか？」

「いや、リーファも一応SAO生還者でしょうが……」

「まあ、私は76層からの途中参戦ですけどね」

「リーファさん、SAOの妖精って呼ばれてましたよね」

「あはは、懐かしいなあその呼び名……」

SAO攻略後に彼女に聞いた話だが、リーファはSAOに兄であるキリトを追いかけたあの世界にログインしたらしい。本来ならあの世界は途中ログインはできない仕様だったのだが、75層で起こったとある事件がきっかけでログイン出来たんだとか……そんな昔(?) 話に話を弾ませつつ、あたし達は歩みを進める。

「でも、こんなところで『キリト様』を知ってる人に会えるなんて思わなかったな」
「あたしたちもですよ」

「僕も偶然とはいえ、こういう風に「黒の剣士」に近しいプレイヤーに会えるとは思ってなかったよ……これも『縁』ってやつなのかもしれないね」

黒フードのプレイヤーが少し高めの段差を飛び降りながらおもむろに言う。『縁』か……あの世界で出来た縁が、今のあたし達を作っているというのは間違いない事実だ。あの世界であたしはかつて、「黒の剣士」にかなわぬ恋をした。だけどあいつへの恋心をあの赤い剣に込めて、あいつへと託して、その恋にあたしなりのケジメをつけた。そして、あたしは――

「一つ気になったんだけど、君達三人って『黒の剣士』とどんなかんげ——つとつと……?」

「あんたいきなりどうしたのよ……?」

「どうしたんですか!？」

「いや、飛び降りようとした瞬間にちよつと揺れたもんだからさ……危ない危ない……」

「あはは……」

「そういえば、確かにほんのちよつと揺れたけど……」

「確かに、ほんの少し揺れたような……?」

黒フードのプレイヤーのそんなリアクションに苦笑い。黒フードの隣にいるリーファ、そしてあたしから少し離れた崖近くのキリト似のプレイヤーもどうやら揺れを感じたらしいけど……

「そうですか？ 私は何も感じ——きやつ!？」

「うわっ!？」

その瞬間キリト似のプレイヤーとその隣にいたシリカの足元が崩れ、崖下へと落下していく。

「シリカ!!」

「そっちのシルフちゃんはケットシーの方を、僕は「黒の剣士」を引き受ける!」

「え、ちよつと黒フードさん!？」

そう言つて黒フードのプレイヤーが走っていく——

〈 s i d e C a l m 〉

足場が崩れたことにより落下する二人。その一人の黒の剣士（似の人）が落下して行く中、彼を受け止めるために僕は走る。——一応シルフの彼女にはケットシーの女の子の方を任せておいたから多分大丈夫なはず。この世界にも……というより、SAOのサーバーコピーであるこのゲームにも、恐らくあの機能——「犯罪防止コード」に基づ

いた「ハラスメント警告」が存在するはず。だからここはあの黒の剣士もどきのプレイヤーを僕が受け止めれば多分大丈夫なはず……確認はないけど。

「間に合えっ……!」

彼が落ちるであろう場所に滑り込み、彼の下敷きになることでなんとか黒の剣士が地面に激突することは防いだ……防いだんだけど。

「まさか、また君に庇ってもらうなんて思わなかったよ。ありがと……ってまた揺れるみたいだね……」

「ひとまず今は動かないようにしてくれると。しかもこの揺れ結構強いし……」

「ああ、そうさせてもらおうよ」

近いな……というより、さっきから揺れに混ざってなんか警告音がうつつすら流れてるような……まさか。

「シリカ、リーファ、それにそっちの黒いの二人、大丈夫!？」

「僕達は大丈夫だよー」

「危なかったー……」

「……むう、やはり格差を感じます……どうしてこうも違いが……」

あっちの方ではケットシーのプレイヤーがシルフのプレイヤーの……豊富な肉まんに埋もれていたのであった。なんだかちよつと涙目になっている気が……というかそ

んなことはどうでもいい。

「というより、なんだかうっすら警告音なってませんか？」

「え？ それって……」

「ちよつとあんた達!? コード! コード!」

ああ、やつぱり、嫌な予感ほしてただけだなあ……

「というより、キリトっぽいプレイヤーの方にコード!? それって……!」

「……あ、そうか。すまない。俺……いや、私、キリト様のアバターに似たけど、中身の

性別は女なんだ」

「女の人——!?!」

……当たってほしくない予感が当たってしまった瞬間だったのであった。

黒の剣士……いや、「黒の少女」と言うべきプレイヤーは、犯罪コードの選択画面を消去しながら言った。

「そういえば、自己紹介がまだだったね。——改めて、私は『クロ』。単純に『黒の剣士』から取ったんだ。性別はさつき驚かせちゃった通り女だよ。よろしく、皆」

——彼女はそう、微笑みながら告げるのであった。

O p s . 0 3 「三人寄らば……いや五人だね」

「——改めて、私は『クロ』。単純に『黒の剣士』から取ったんだ。性別はさつき驚かせちゃった通り女だよ。よろしく、皆」

キリトに似たプレイヤー「クロ」はそう微笑みながら僕達に自己紹介をする。先刻のハラスメント警告表示案件で彼女と分かった今、さつきのアレ、（前話参照）大丈夫だったのか……？

そんな事を心配した僕は黒の剣士似の彼女——クロに視線をちらりと向けて見た……が彼女はこちらの視線には気が付いていない模様。いい……のか？

「わたし達も自己紹介しないといけませんね。シリカです。こっちは相棒のピナ」

「きゅいー！」

「へえ、そっちのフェザーリドラ、随分君に懐いているみたいだね」

「はい、この子はわたしのS A O時代からの大切な仲間なので」

「きゅるきゅいー！」

僕の言葉にケットシーの彼女——シリカちゃんが答える。彼女の肩にまるで某携帯獣の黄色い鼠の如く乗る水色のフェザーリドラの懐きようからして、かなり長い間を共

に過ごしたというのが一目でわかるほどだ。すると……

「きゅー！ きゅるつきゅいーん！」

「おわつと、おお、なんだいこのお、すつごいふかふかじやないか？」

「ちよつとピナ、いきなりじやれついちやだめつてば？」

いきなりシリカちゃんの相棒であるピナが僕の顔めがけて飛びついてきたのだ。僕の視界は水色のモフモフした毛並みで覆われ、干したての羽毛布団に顔を埋めたかのような温かさが僕を包む。なんかいい香りもするし。さて、ここからやることはただ一つ。

「よお〜しよしよし、なんだい？ 果物かい？ 果物3つ欲しいのかい？ 可愛いヤ

ツめえ？」

「きゅいーん！」

全力で、撫でまわす。それだけだ。

「へえ、あのピナが初対面の人にこんなに懐いてるつて、珍しいじやない？」

「なんだかム〇ゴロウさんみたいですねあの人」

——可愛がらねば、可愛がらねばならぬ

そんな謎の天啓めいた感情が、僕の心Dを走り抜AけたのであSったのであHった。

※数分モフモフを堪能、しばらくのピナとの戯れの後、ピナはご主人に引き取られま

した。

「もう、会ったばかりの人にじゃれついちゃだめだよピナ？」

「きゅつきゆるい！」

「ふむ、もうちよつとじゃれついてくれてもよかったんだけどなあ……」

「いやアンタなんで妙に満足気なのよ……」

いやあ、あのモフモフは病みつきになりそうなくらい心地よかったんだもの……無理もないさ。

「じゃあ次はあたしかな。あたしはリズベツト。リズつて呼んでくれていいわ」

「ああ、あの時最初に僕が声をかけた人か」

「そうよ、全く、あの時はいきなりでびっくりしたわよ……」

「リズベツト……リズベツト……？」

何か頭の中で引つかかる。なんだったか、あつちの世界で聞いたことがあるような……？

「あ、思い出した。いつからかお店に全く店主が来なくなった第48層リンダースの武器店の名前が確かそんなだったような……？」

「妙に癖がすごい覚え方ねあんた？ いや実際事実なんだけど……というよりあんた、

あつちのあたしの本店を知ってたの？」

「いや、僕あつちの世界でその店で武器手入れしてもらった記憶があつたからさ……」

なお一回だけだったが。その時の手入れのクオリティがかなり高かつたのもう一度研いでもらおうかなと行って見たら店主がおらず結局別の所で研いでもらつた記憶があつたのだ。その後度かりベンジして行って見たもののその全てにおいて研ぐチャンスには恵まれませんでした。悲しみ。

「じゃあ最後はあたしね。リーファだよ、よろしくね！」

「おお、元氣いっぱいって感じだね」

「それで、あたし少しし気になつてたんですけど、なんでさつきからフードかぶりっぱなしなんですか？」

「いやまあ、そこはちよつと、おいおいね？」

「まあまあリーファ、あいつにもそれなりの事情つてもんがあるんでしよう」

「そうですね」

リーファちゃんにも指摘されたこの黒に近い濃紺色のフードにフードと同色のズボンというほぼ黒づくめの姿は、僕のある意味切実……いや、姿を隠さねばならない事情があつての物なのだ。この世界で賞金首という実力あるプレイヤーに選定された（しまった）僕なのだが、ソロでこういうクエストをこなしていると、結構な確率で賞金首狙いのプレイヤーに遭遇してしまうのだ。クエスト進行が賞金首狩りによつて邪魔さ

れてしまうのを防ぐために、隠蔽効果が高めなこの装備を着けて、加えてフードを被る
ことによつて賞金首狩りへの顔バレを防いでいるというわけ。

「そういえば僕も自己紹介が遅れてしまったね、僕はナギ。今後ともよろしく頼むよ」

この「ナギ」という名前も、先述の隠匿装備と同じようなもので、僕がこの世界での
本当の名前、「カーム」を使えない時のコードネームのようなものだ。僕の現実世界での
名前のもじりではあるが、こつちの名前もなんやかんやで気に入っている名前である。
あつちの世界でも使っていたということもあるからだろうか……

「ナギ……?」

「どうしたんですかクロさん?」

「いいや、なんでもないよ」

……何故かクロが僕のコードネームに反応したようだけど、どうしたのだろうか。

それはさておき
閑話休題

「でもまさか、クロさんが女性だったなんて思ってもみなかったですよ、本当にびっくり
しましたもん」

「すまない、私も意識していなかったし、この姿で『私』っていうのもなんだか違和感が
あつたから……」

「あたし達も知らなかったとはいえ……ナギ、あんた変なことやってないでしょうね?」

「僕は誓ってセクハラはやってません」

迫真の表情でリズに語り掛ける僕。確かに距離も近かった、体はほぼ密着状態だった。それでも僕はやってない。故に高らかに告げよう……

「誓って！ セクハラは!! やってません!!」

「ああもううっさいわよ！ 二度も言わなくていいじゃない!？」

「いやまあ、ホントに大事なことだからね、大声で宣言させてもらったよ」

「あはは……でも大丈夫。ナギは本当にやってないから」

クロが僕の言葉に加えるように言う。僕の大声宣言に少々苦笑いしながらだが。

「なんかナギ君、最初のクールな印象とはかけ離れてるような……」

「わかるわリーファ、一言で言うなら、二枚目なだけで三枚目が拭い切れてないっていうか……」

「おーい、聞こえてるよ君達ー」

「まあまあ皆さん、セクハラ云々からは話を変えましょうよ」

シリカちゃんも僕達の喧騒を鎮めるように告げる。

「それにしても、クロさん強いですね。あんな大型の体力を全て削りきるなんて……しかも二刀流で」

「そうでもないよ、実際一人じゃ削り切れなかったさ。ナギがタゲを粗方引き受けてく

れたおかげだったし」

クロが背中中に懸架していた二振りの剣を抜きながら答える。純黒に輝くその刀身に、クロの顔が反射する。

「それに二刀流って言っても『キリト様』へのあこがれでやってただけだからね。左手は完全防御用で攻撃はSAOでつかつた片手剣ソードスキルだし」

「だから、私の強さ——この二刀流は形だけの『偽物』なんだ」

自嘲するように、自身の心を自傷するようにクロは言う。

「でも、それは誰でも一緒でしょ？ SAOではキリトが二刀流スキルを持ってたけどALOははまだそのスキル自体実装されてないんだし」

「それでも、だよ。本物のあの人だったら、ずっと簡単に——それこそ、誰の助けも無しに倒せてたんだろうなって……」

そんなクロの自嘲じみた言葉にリズが宥めるように返す。しかしクロはリズの返答を遮るように続けていく。言葉はどこか暗い何かを孕んでいるかのように。

「……私は、もっと強くなりたいね！ あの人みたいに一人で全てを守り切れるような力が……！」

「——そんな力が、ほしかったんだ」

そう言ったクロの眼差しは、どこかで何かを喪ったような、悲しい光を帯びていた。

——そんな彼女の言葉が僕の心に反響する。守るための力……ロツサ、かつてボクが守れなかったモノを守る力を、今の僕は持っているのだろうか？ そんな自問自答を僕は一人繰り返す。

「クロ……」

「クロさ……わっ!？」

唐突にクロが歩みを止めたことで、すぐ左隣を歩いていたシリカちゃんやクロにぶつかった。痛がる彼女の鼻っ面は、仮想世界のはずなのになんだかちよつぴり赤くなっている……ような気がする。多分。

「あいたた……どうしたんですクロさ……」

クロが無言で見つめるその先には、無残にも荒らされた天使のバラ庭があった。バラが地面に天使が元々いた建造物も見事なまでの崩壊っぷりである。

「あんなに綺麗に咲いていたバラが……ひどい」

「何者かに襲撃を受けた感じね……」

「クエスト進行上仕方ないとはいえ、無粋な輩もいるって感じだね……」

内心このバラ庭の景色は気に入っていたため、荒らされた事に内心不満タラタラな僕であった。

「ちよつと、この足跡つてもしかして……」

「どうやらこれが襲撃者の痕跡って感じみたいね」

「うわあ、凄く大きな足跡……」

リズが何かを見つけた模様。彼女の視線の先にはバラ庭の中央の建造物のすぐそばに刻まれた僕らの身長をゆうに超える程の巨大な足跡がでかどかと刻まれていた。ということはつまり……

「どうやら、巨人が襲撃の犯人みたいだな」

「シキ、いつの間にか起きてたの？」

「そろそろクエストが進行する予感がしたからな。……なるほど、あっちの世界ではこのクエストの襲撃者は天使に敵対する悪魔の信奉者って所だったけど、こっちだと巨人なんだな……」

「ALOにコンバートされたときに世界観に準拠するために北歐っぽく巨人の介入要素が追加されたって事かな……？　ってことは、あの地震は巨人の伏線だったということか……」

「そういう事」

ピクシー状態のシキの解説も加わり、今回の襲撃の犯人もわかったところで……

「ちよつとナギ、さつきからあんたと話してるそのピクシー、誰なのよ？」

「さつきまでいませんでしたよね……？」

「オレか？ オレはシキ。まあ、こいつのプライベートピクシーってところだ」

「わわ、このピクシー、着物着てますよ！ なんだかサクヤさんみたい……」

どうやら三人がピクシー状態のシキに反応した模様。というよりシキの格好にリーファちゃんがやけに……

「そうか、たしかリーファちゃんはこの領主さんがこんな服だったっけ」

「あれとはちよつと違うと思うぞ？」

「ふーん……ピクシーっていうよりも、どっちかといえばキリトのときのユイみたいな感じね、あのシキっていうピクシー……」

「ユイ……って誰だいそれ」

「端的に言うなら、キリトの娘……みたいなものかしら……？」

「大きい妹さんもいましたよね、あの人一見すると妹には見えませんが……」

「ストレアさんですよねそれ。確かにあの人ユイちゃんの妹だとは思えないですよね」

「な、なんだかまた私がしらない話が……」

「わかるともクロ、僕もなにがなんだかさっぱりわからないから……」

どうやらキリトさんの娘的存在は、なんだか複雑な事情があるご様子で……

「ジェネシスの所にも、レイとサクラがいたわね……」

「はい、サクラさんの回復スキルには、いつも助けてもらいました」

また初めて聞く名前が飛び交う中、ふとシキの様子を見ると。

「レイにユイ¹、ストレア²にサクラ³……オイオイ、勢ぞろいじゃないか……」

「ん？ それってどういう……ああそうか、シキは4番目なんだっつけ」

彼女たちに聞こえないように僕は小声で話す。そう、これを読んでいる皆様には多分お分かりだと思うがシキの正体はM H C P……あの剣^Sの世界^Aのメンタルカウンセリングケアプログラムの四号機というわけなのだ。どうして僕がM H C Pであるシキと関係を持つようになったかは……またいずれ話すことにしよう。

「それにしても、結構大変なことになってきましたね、そわそわしながら待ってた天使が懐かしいですよ」

『べっ……別にお前らの事なんか心配してなかったんだからな！』なーんて」

そんなシリカの言葉にリズがああ天使のモノマネで答える。どうしてだろうか、妙に声とセリフがベストマッチ！ しているような気がするのは気のせいだろうか？

「おお、リズ結構モノマネ上手いね？」

「どうよ、あたしなりにやってみただけ、案外似てたでしょ？」

「あはは、今となっては癒しですね、ツンデレ天使っ」

「で、肝心のツンデレ天使はどこに……」

ツンデレ天使談義に笑顔が咲く中、シリカはそんな談義のネタ元の天使を探す。しかし肝心の天使本人の姿は庭園のどこにもない。

「きゅい」

「ピナ？」

そんな中、シリカちゃんの肩に乗ってつるピナが何かを見つけたらしい。鳴き声でご主人に知らせるピナ。その紅玉の視線の先には、崩壊した花園の中心、あのツンデレ天使が傲岸不遜な態度で腰かけていた場所に、光り輝く手のひらサイズの純白の羽が鎮座していた。

「ふむ……これ操作できるオブジェクトみたいだね」

「みたいですねナギさん、いいですか？」

「大丈夫」

シリカが羽に触れると、光と共にあの天使の姿が顕現した。しかしどうやら本人ではなく映像での登場ではあるが。

「貴様達、良く戻った！　だがタイムオーバー……試練は失敗だ。残念だったな」

傲岸不遜な態度はそのままに彼女は話す。しかし、現れていきなり失敗と彼女は口にするが、あのツンデレ天使の事だ。恐らく裏があるのだろう。

「貴様らに渡す指輪はない、今すぐ去れ！　いいか、決して追っては——」

最後まで不躰な言葉遣いを崩さないまま、彼女の映像は途中で途切れた。

「消えた……？」

「一体何が……」

突然天使が消えた事に困惑するシリカちゃんとリーファちゃん。そんな中リズは。

「ふふっ」

「リズさん？」

「荒らされた庭園に攫われた天使、そしてあたし達を遠ざける暴言——なかなか燃えてくる展開ね。嫌いじゃないわ」

背景ストーリーの考察に一人燃えていたのであった。さつきから考えながら言葉を口にするが、そんな彼女の静かに、しかし熱く考察する姿は、彼女も「こちら側」の間だということをしつかりと実感させてくれる。

「もしかしたらPLだけじゃなく天使との絆も試されてるのかしら？ うーん、楽しくなってきたわね……！」

「リズさんが燃えています」

「あたしも嫌いじゃないけどね」

「僕は普段は別の方向で考察とかはするから、そういう気持ちはわかるなあ……」

僕は普段は自身のスキルの改良とかで思考の海にどっぷりつかるとある故にわか

るというか。まあそれはさておき。

「さーて、行き先は……きつとこの巨人の足跡の先ね。よおし、ツンデレ天使を助けてデレさせましょうか！」

「賛成！」

「ちゃんと助けに行くから、待つてなさい！」

さて、このクエストもいよいよ大詰めつて所か……リズに感化されたわけではないけど、正直僕もこのクエスト結構楽しんでるし。

「そうだ、これも何かの縁ですよ！ ナギさんとクロさんも一緒に行きませんか？」
「僕は構わないよ。道連れのクエストなんだ、最後まで付き合わせてもらう——」

「悪いが」

僕の台詞を遮るように、クロは言う。

「私はここから一人で行く」

悲壮な決意を、胸に抱えて。

O p s . 0 4 「お節介は英雄の本質」

（side Calm）

「私はここから、一人で行く」

「「え？」」

シリカのクエスト同行の誘いに、クロははつきりとした口調で断った。クロの顔は真剣そのもので冗談を言っているようには見えない。だがどうしてだろうか。断る理由が見つからないがゆえに言葉に困ってしまう。パーティを組むのには基本的にデメリットなんてないはずなのにどうして？

「どうしたんですかクロさん、あたし達何かしちやいました？」

「違うんだシリカ、そうじゃない。私は元々このゲームでは誰ともパーティを組むつもりは無かったんだよ」

困惑を隠せない様子のシリカちゃんからの問いかけに静かに返すクロ。あんなに楽しそうにしてたのに、どうして距離を離すようなことばかり言うのだろう。先ほどまと今の彼女の態度の違いに、僕も口を挟んでしまった。

「だけどクロ、それにしても君、なんだか楽しそうだったじゃないかい？」

「あれは君たちが『キリト様』を知る人達だったから思わず盛り上がったってしまっただけだよ。——だから、私達はここでお別れだ」

僕の質問に冷淡に彼女は答え、話を切り上げようとす。——ただどそう口にするク口の瞳は、どこか寂しそうで、それでいて悲しげな光を帯びていたのは気のせいだろうか？

ただ胸にちくりと刺すような痛みは、きつと本物だ。——どこか懐かしい感情が僕の胸を満たしていく。ああそうか。ボクは放っておけないんだ。本心を黒いヴェールで隠すあの少女の事を。

そんな僕の思いを代弁するかのような強く制止するような声が、僕の隣から聞こえてきた。

「でもっ！ こゝから先でさっきの魔獣よりも強いモンスターが出てくるかもしれないのに、一人じゃ危険ですよ！」

吠えるようなシリカの叫びを、クロはそれを嘲笑うかのような表情を浮かべ肅々と言葉を紡ぐ。

「危険？ ハハッ、そんなものはこの世界にはないって……シリカも知っているだろう？」
大仰な口調でクロは僕らに問いかける。シリカちゃんからは……いいや、僕を含めた他のメンバーも何も言い返せない。

『たかがゲーム』……ここじゃあ私達は死なないんだから」

悲しみが織り交じったような乾いた口調で、そうクロは言い切った。言い切つてしまつたんだ。

——そう。確かにこのALOはただのゲームであることには違いない。あの世界と違つて、アバターの「死」が絶対の終わりではないし、HPが「ゼロ」になつたとしてもやり直しが出来る。それは覆しようのない事実だ。

けど、僕はそれを許せるのだろうか？ 否。許せなかつたから、今の僕がここにいます。だからこそ、胸の奥で鳴り続ける警鐘を止めなくちゃいけない。分かつてるよ、本当はクロを見送るべきじゃなくて、止めるべきなんだつてことぐらい。

「皆との話は楽しかったよ。これは本当さ。さて、すまないが私は行くよ……少し待たばクエストがりセットされるから君達だけで続行してくれ」

物悲しげな瞳を揺らしながら、淡々とクロは言う。それ以上は関わるなど言わんばかりに語気が鋭利になつて、僕は喉元に突きつけられた剣を外すことができなかつた。そして。

「また会おう、カームナギ」

なぜか僕と目を合わせて、クロは朗らかな笑顔で呪いまじなをかけるようにそう告げると、踵を返し空へと飛び立っていった。最後にどうして僕に……？ 疑念が僕の中を渦巻

きこびり付いて。

「クロ、君は……?」

絞り出せた言葉は、たったそれだけだった。

「クロさん?」

シリカちゃんの方も、クロの飛び立つ背中を見つめることしか出来ずただ茫然としていた。いやまあ気持ちちはわかるよ? あんな悲しそうな顔で淡々と語るもんだからね? 掛けづらいよね、声。

「えっと、二人とも、確かに気にはなるけど、先にあのクエストを始めていたのはクロさんだし仕方ない……よね」

去っていったクロに声をかけることもできず立ちすくむ僕とシリカに、戸惑いながらも諭すリーファの言葉が現実を突きつける刃となつて、ゆっくりと胸を刺しているかのように聞こえた。

「そう、ね」

リズムもそんなリーファに同調するように静かに頷く。他人の事情に入りこむことなく、誰にでも容易く出来ることなんかじゃない。そんな事を考えている僕の脳裏では、先ほどクロが言ったあの言葉がいつまでも響き渡っていた。『さようなら』か……

——いや違う。あの言葉には、彼女なりの願いが込められているように聞こえた。そ

うなれば。

「クロさんは、大切な人を亡くしているんじゃないでしょうか。『SAO』で」

不意に聞こえたのは、シリカちゃんの声だった。長く沈黙した空気にメスを入れるように響き渡るその音は、思考の海に沈む僕を引き上げるのには十分で。

「追いかけてみましょう、リズさん、リーファさん」

しばらくの沈黙の後に、決意に満ちた声色でシリカはそう二人に言い放った。彼女の瞳には一切の迷いが無い。その根幹には、あの世界を生き抜いてきた心の強さがあるのだろう。敬意の念を込めて、僕は彼女を見つめる。

「でも、追いかけたからって、あたし達に何が出来るとも——「まだ!」」

「まだ何もやってないじゃないですかっ!」

弱弱しいリズの言い分をシリカちゃんが遮るように語気を強める。まだやっていないのに諦めるのは違う。ああ、確かにその通りだ。

「——さようならば、また会うためのおまじない、か。どこで聞いた言葉だったか……」
思考の海の中で渦巻いていた言葉を口に出す。僕の言葉に、「ナギさん?」とシリカちゃんには首を傾げられてしまったけど、ちゃんとした理由はあるって事をきちんと伝えないと。

「いや、さっきのクロが言った言葉が気になってさ。まあ僕の独り言はさておき、僕はク

口を追いかけようとは思ってるよ」

改めて、クロを追いかけることをここに宣言する。「ナギ、あんた……」と、リズが何か言いたげな様子で僕を見つめているけど、やっぱりこれだけは譲れない。手を伸ばせるならば、伸ばしてみせる。そう決めたからさ。

「それに、なんだかクロの様子がさ、死に行くような様子だったのが気になってね……」

こう言っておいてなんだが、正直自分も人の事を言えないのが玉に瑕といったところか。けど放っておけないことは変わらないし。まあきつとどこかでツツコミを入れられるだろうけど、その時は聞き流しておこう。いちいちそんなものを気にしている場合ではない。

「死に行くって、じゃあクロさんは……!?」

そんな僕の言葉にリーファが青ざめていく。けど安心して欲しい。きつと彼女もあれを装備していることはないだろう。あれはクリア後に自主回収がされていたはずだし。

「VR世界では死ぬ事はない——さっきのクロの言葉は確かに事実だ」

もう僕らを縛るあの装置も^ナゲ^ーム^スも存在しないし、この妖精の世界も、シビアなところは数えきれない程あるけれど……リトライは出来る。

「だけど彼女をあのままにしておく、別の意味で死んでしまう気がするんだ……具体的に言うなら『心』が死んでしまう……そう僕には感じ取れた」

例え身体が死んでいなくても、心が死んでしまつてはやり直しは厳しいものになる。それは現実でも仮想でも、どの世界でだつて同じことだ。現に僕自身もかつて心が死ぬ寸前で踏みとどまつたことはあつたが故に、その事はよくわかつているつもりだ。そしてその先にある破滅は……もう見たくもない。

「そんな……」とリーファちゃんが小さく悲鳴を上げる隣で、シリカちゃんは納得したように頷いた。どうやら何か掴めたみたい。彼女が得た答えを知りたくて、視線を向けて言葉を待った。

「今のナギさんの言葉で確信出来ました……クロさんは絶対一人だなんて望んでいません。だつて、一人を望むような人は、あんな風に笑つたりしないですよ。そう思いませんか皆さん？」

気弱な態度を見せていたリズとリーファちゃんに問いかけるシリカちゃん。「……確かに、ね。そういえばあの迷い狼も、そんな感じだったわ」呆れたように言うリズだけど、ちよつと口元が緩んでるし、「そつか、お兄ちゃん——キリト君もそうだったよ」リーファちゃんの声色も弾んだ。

思い浮かべているのは意中の人ののだろうか？ いやまあ、今はそれは置いておこう

……と言いたいが。

——かつて僕が守れなかった大切な仲間。果たせなかった約束。そしてあのさよならを、本当の意味の「さようなら」にしない為にも……!

「だから、私はクロさんの力になりたいんです! お節介になるかもしれませんが、それでも出来ることがあるなら、やれることはやりたいんです」

リズ達へと向けるシリカちゃんの瞳には、覚悟と決意の炎が満ち溢れていて。それが僕には、なんだか少し眩しくて。

同じような事は僕も考えていた。だけどそれは彼女達みたいに誇れることじゃあない。どこか心の片隅で過去の僕が指をさして笑っているかもしれないけど、それを振り払うように彼女に賛同する。「それでいいんじゃないかな、シリカちゃん」

「ナギさん?」

「お節介ってさ、英雄の本質だと思うんだよ。僕はキリトさんの事はまた聞きで聞いただけだから詳しくは知らないけど、あの人はそういうお節介で、色んな人を助けてきたと思うんだ」

何も助けることができなかつた自分が、英雄の本質なんてものを語るなんて鳥漕がましいかもしれない。だけど、シリカちゃんの真つすぐな瞳を見ていたら、どうしても溢れるものがあつたんだ。この衝動は本物だ。今ここに間違いない存在している。

「だから今度は僕たちの番って事。助けられる手があるなら、僕は出来る限りで救いたい……というか、僕はもう何も喪いたくないからさ、可能性がゼロでない限りは助けたいんだ」

そう自分に言い聞かせるように口にする。『もう何も喪いたくない／喪わせない』そんな呪いにも似た決意を込めて。

「ナギ、あんたもクロの事言えないわよ？　なんやかんやで二人してそっくりじゃないの」

「ああもう、いい感じに決めようとしたのに水差さないでくれないかなりズう!!」

「だあーもう！　聞き流すって決めてたのに！　ツツコミ入れられたら思わず反応しちゃったじゃないか!?　もう台無しだよ!?　ここまで積み上げてきたシリアスが全部パアになっちゃったじゃないか!?　そんなこと言われちゃったら、拗ねてやるよお!」

「まあまあナギ君、そう怒らずに……」

リーファちゃんのたしなめる声が聞こえるけど、僕はいじけています。「所詮僕は三枚目……二枚目の僕は浜で死んだんだ、もういない……」つくづく思うけど、どうしてこう僕の空気はそういうのに耐えられないのかなあ……

「それにですよ？　ちよつとナギさんの話に水を差してしまうかもしれないけど……別人だつてわかつてるしもうすつごくすーつごく個人的な理由だつてこともわかつて

ますが……放っておけますか？ あんなキリトさん」

「!!」

へこたれている僕を尻目に、シリカちゃんがジト目と照れ顔で言ったその言葉に、一気に雰囲気が変わった。具体的に言えば、こう……『女子三人寄らば姦しい』という熟語が相応しいような、先ほどのとげとげしたそれとは真逆のほんわかした雰囲気だ。

「そこ言っちゃいますか」

「言っちゃいます」

「違うって分かってもやっぱり大きいわよね……ほんとにくたらしいっ」

……なんだか三人の間でガールズトーク？ の様なナニカが繰り広げられているが

……というかこれはいわば『キリト——ク』というやつなのか？ いやキリト——クって

なんだよとは自分でも思うけどさ？

そんなことはさておき
閑話休題

「さあ、行きましょうナギさん！」

「おや、そっちのガールズトークは終わったのかい？」

「はい！」

シリカちゃんの澆刺とした言葉を受けて、仕切り直しに咳一つゴホンと払ったら景気よく声を出す。

「よし、それじゃあ早くクロに追いつかないとね……『後悔しない』ためにも！」

僕の胸の中は、突き刺さっていた刃物もなければ、警鐘も鳴り止んでいる。ただ後悔したくないっていう決意の炎だけが、静かに燃え盛っていた。

Side Kuro & Kuro's Recollection

——天使の指輪。それは、私たちを結びつけてくれた約束の証。

それは、まだ私たちが浮遊城で過ごしていた日々の想起。

まだ彼女が……「ロツサ」が生きていた日々、その幕間の一ページ。

『はい、これあげる！』リングオブエンジェルウィスパー「天使の指輪」！』

『え、私に？』

『うん！』

俺私の瞳に映る彼女は撫子色の髪を揺らしながら、いつも通りの屈託のない笑顔で頷きながら白銀に輝くそれをくれた。

『あれ、それってボクにくれたのとおんなじアイテム？』

『そうだよカーム君、まあホントはこれ二人で交換するものなんだけどね』

右目が銀髪で隠れ、露になっている緋眼が際立つ少年カームは、右中指にはめられた私を持つ物と同じ指輪を不思議そうに眺めながらロツサに尋ねた。

『へえ……というかロツサ、わざわざボクとルクスの為にこれを？』

『うん！』

そんなカームの問いかけにも、真つすぐな瞳に光を溢れんばかりに答えるロツサ。そんな彼女の純真さに少し眩そうにしながら、カームは更に尋ねた。

『それはどうも、だけどステータス補正とか全然ないけど……なにかあるの？ この指輪』

『わかつてないなあカーム君、この指輪はそういうのじゃないんだよ♪』

満面の笑みを浮かべながら、私たちに彼女は話してくれた。この指輪が絆を象徴するアイテムだった事、私たちに渡すために苦労してそれを手に入れた事を。

『それと本当はこれ、みんなで交換するものなんだよ。君たちこういうサブイベント全然やらないでしょ？ カームは人助けにかかりつきりであまりこういう事に興味なさげだし、ルクスはルクスでなんだか無理は出来そうにないし……だからいつか、三人で交換出来たらいいなって思うんだ』

——あの頃S.A.Oの私は、人を信じられなくなっていた。残酷なデスゲームの世界で、精神を少しずつすり減らしていた私。——だけどそんな俺にも求めてくれる人たちがいてくれた。そんなことを一人思っていたら。

『そうだ！ じゃあその指輪、二人で先に交換したらどう？』

『はい？』

私を思考の海から釣り上げるような唐突なロツサの提案に、二人して変な声が出てしまった。とはいえ、こういう突拍子もないことを思いついたりするのはロツサのいつも通りなただけだ。

『……どうするロツサ？ 交換しないわけにもいかないし……』

『そうだね……交換、しようか？』

ロツサの真つすぐな瞳に見つめられながら、彼らしからぬぎこちない苦笑で私に尋ねるカーム。そんな彼の様子に、思わず私も彼と同じ表情になつて。

結局、ロツサの提案に乗ることにした私は、彼から渡された指輪を、彼と同じ自分の右中指につけてみた。白銀の指輪が仮想の光に照らされてきらりと輝く。天使の羽が交差したその中心にハートがかたどられたデザインは、確かに永遠の絆を示すのには相応しいけど……

『おおー！ いい感じだね二人とも！ お似合だよ！』

『ちよつとロツサ！』

『あはは、相変わらずルクスは初心^ぶだねえ、というか今気づいたけどなんだかそれ、デザインだったアイテムの説明文とかを考えると結婚指輪みたいだね？』

「~~~~つ~~~~?!」

余りの恥ずかしさに思わず声にならない叫びをあげてしまう。うう、どうしてロツサ

はそんなことをひよいひよい言っちゃうのかな？

『うーん、お似合いと永遠とかそういうのはボクにはあまり興味はないかなあ……』というカルクス、なんだか物凄く顔が真っ赤だけど大丈夫かい？ 風邪ひいたのならいいものがあるけど……』

カームは相変わらずこういう恋愛的事案にはびっくりするほど無関心というか……ああ、彼の隣のロツサも『だめだこりや……』って言いたげな呆れ顔だし……

『ともかく、ボクはそろそろ行かないと。こうしている間にも、誰かがどこかで涙を流しているかもしれないし……助けられる人を助けないと。——それがボクがこの世界で生きる唯一の意味だから』

そんなぐだぐだな私には目もくれず、彼はまたたつた一人で「人助け」へと向かっていつてしまった。

私たちのもとを去る彼の紅い瞳には、使命感にも似た漆黒の決意の光で満たされていて。その輝きは自分をも傷つけてしまう諸刃の剣のようで。どこか近寄りたいたいけど、誰よりも愚直に『人助け』をするその姿に、私は……

『ほんと、カーム君は相変わらずだなあ……ブロッサムちゃんとしてはなんだか不安になるレベルだよ』

『ロツサ？』

『いや、お助け娘のカンってやつかな？——カーム君はさ、まだ私がルクスとあつてない時から「人助け」をやっていたんだよ。だけどその人助けは、私から見たらちよつと……いや、かなりおかしいものだった。「自分を勘定に入れてない」んだよ、あれはどつちかといえれば自己犠牲に近いし、彼を一言で言うなら……「心が空っぽ」なんだよ』

綱渡りのようだと、私は思った。ロツサが語る彼の行動原理はあまりにも危ういもので。そしてロツサは一呼吸を入れて私をじつと見つめると更に話を続けた。

『空っぽとはいっても、彼の場合は「元々あつた心がバラバラになつてそれをつぎはぎで修理した」って言った方がいいけどね。だから彼はいつ壊れてもおかしくない。彼に必要なのは、多分居場所。そして心の抛り所なんだよ。だからさ、いつかルクスが、彼の「止まり木」になつてくれたらなあつて思うんだ』

『止まり木？』

『うん。もうちよつと詳しく言うなら、「光の止まり木」だけどね。だから約束。指輪の事もそうだけど、もし私がいなくなつたその時は……なんてね？ とにかくカーム君の事、よろしくね。さあ、私たちもカーム君を早く追いかけないと——カーム君一人だけじゃ危険だしね』

思い起こされるのは、かつての記憶。大輪の花のような笑みを浮かべる少女がまだ生きていたあの時の光景。私の名前になぞらえたあの約束は、まだ私の中に刻まれてい

る。だけどそれができない今はせめて、いつかのあの指輪の約束を果たすために。俺私は

「……カーム」

皆にはああきつくいつてしまったけれど、あれは正直なところやせ我慢だし、私一人じゃどうなるかなんて分からない。だからもし、もし叶うのならば……

「希望はどんな時にでもあるんだよね？ カーム……」

「最後の希望」は来てくれる。なんてちっほけな願いを込めて、私はボス部屋の扉を開いた。

〈 s i d e C a l m 〉

「巨人の足跡の先……」

「ようやく見えてきたね、あの扉の先がそうなのかな」

シリカちゃんとリーファちゃんが二人してそう口にする。たった一人で飛び立っていったクロを追いかけて、巨人の足跡を辿りにたどり、僕たちはようやく彼女が向かったであろうエリアにたどり着いたわけだけど……

「いかにもって感じの扉だねえ……THE ボス戦って感じの気配がプンプンするとうか」

「独特な表現ねアンタ……」

いやだつてリズさんや、ここで例の足跡も途切れてるわけですし。そんなもつて目の前にはこんな扉もありますし。つまりはそういう事なんですよ。ええ。

「クロさん、一人で大丈夫でしょうか？」

シリカちゃんが閉ざされた扉の向こうを不安そうな瞳で見つめる。あんな様子で去つて行つたクロがこの先にいるのだから、心配するのも道理というわけかな。

「大丈夫だと思つよ、クロさんの強さはさっきの中ボス戦で見たじゃない？」

シリカちゃんを気遣うようなそんなリーファちゃんの言葉に、先ほどのあの巨大狼獣人との戦闘を思い出す。最新アップデートで追加された新エリアの、それもSAOの再現クエストのミッションともなると、難易度も相当高くなるはず。自分達が介入するまでその高難度クエストの中ボスとたつた一人で渡り合つていた事を考えると、クロの實力は相当なものになるわけで。

「むしろ戦力的にはシリカの方があやういんじゃない？」

「なつ！ そ、そんなことは……ないはずですよ……よ！」

憂鬱そうな表情のシリカちゃんをからかうようにリズが言う。それにぷりぷりと反論するシリカちゃんの様子を「あはは……」とでも言いそうな苦笑で見守るリーファちゃん。ふむふむ、仲良き事は好き哉好き哉。

「冗談よつ、いつも頼りにしてるわよシリカ!」

シリカちゃんの背中をポンとたたきながら、激励をかけるようにリズは朗らかな笑顔で告げる。そして彼女はおもむろに振り返り、僕の方を指さして高らかに言った。

「それに、戦力のことで言うなら、あんたも頼りにしてるんだからねナギ!」

「え、僕?」

他人から見れば、その時の僕は「きよとんとしている」と形容するにふさわしい様子だったであろう。そりゃあまあ唐突に名指しで呼ばれたものだからさ。無理もないわけですよ。

「クロと二人であたしたちをボスの全体攻撃から守ってくれたり、その後あのボスのタゲをほとんど一人で受けきって、クロへのダメージを最小限に抑えるとか並大抵のプレイヤーじゃできないわよ?」

リズがああの時の僕の戦いを振り返りながら言う。とは言っても、あのタゲ請負作戦のそれは僕の本来の戦闘スタイルとはかけ離れたものだったが、そんなに印象に残ったのだろうか?

「あの時はあんな感じで戦ってたけど、僕の戦闘スタイルって基本魔法での弾幕なんだよね……正直僕近接戦闘クツソ苦手な部類だよ?」

「あんな戦いをしておいて苦手なんですか……?」

シリカちゃんがちよつとびっくりした表情で訊ねるけど、ホントに苦手だからね？
PVEならともかく、PVPになると本当に無理だから。うん。

「とにかく頼りにしてるのは事実だから。頼むわよナギ！」

そう言つてリズはシリカちゃんにしたように僕の背中を張つて櫂を入れた。まあ、頼られたのならば、それに応えなきや男が廢るよね……！　そしてリズはボス部屋の扉に手をかけ、僕たちの方を振り返る。

「さあ皆、準備はいい？」

「もちろん！」

「はい！」

そう訊ねるリズに、意気揚々と答える二人。鬪志はメラメラ、準備はばつちりのようだ。そしてリズはもう一つ僕たちに問いかける。

「戦闘の準備もそうだけど、来るなつていうのを追いかけてきた以上、そういう覚悟も……ね」

こういうことに首を突つ込むことは、有体に言えば余計なお世話かもしれない、けど毒を食らわねば皿まで。一度決めたのならば、最後までしっかりケリをつけないと。

「覚悟なんてとつくにできてるよ。クロは助ける、クエストもクリアする。両方成し遂げてやって、大団円で帰りましょうとも！」

「そうですねナギさん、バツチリ決めましょう！」

「絶対助けるから、待ってて、クロさん！」

各々の決意は決まったみたい。その様子を見たリズも同じよう。

「皆いい返事ね、それじゃあ行くわよ！」

たった一つの大きな決意を込めて、リズは固く閉ざされた扉を開いたのであった。

O p s . 0 5 「スライムと希望と置き去りにしたもの」

（ s i d e C a l m ）

リズが開いた扉を抜けると、スライムの大群が部屋の中を埋め尽くしていた。目測で
きる数は大体50体、だが間違いなくそれ以上だし、確実に数えられるものではない。

「って何このスライムの数!? 多すぎでしょ!」

扉を開けたリズもあまりのスライムの数に驚愕の表情を浮かべる。その隣のリー
ファちゃんとしリカちゃんに至ってはちよつと引いてるし。……いやまあ、無理もない
か……。あのスライム、如何にも「毒です」って感じのけばけばしい紫色だし。水色と
かだつたらまだマシだったんだろうけど。こいつらは確実に「わるいスライム」ってや
つだね。間違いない。

あんなポイズンたつぷりなゼリーは絶対食えない。多分食べたら確実にリメイ
ンライトになる事は避けられないだろう。

「というよりなんだいあの砂時計、スライムでぎゅうぎゅう詰めじゃないか……?」
「どうやらあれがスライムの供給元みたいですね……」

「きゅん」

わるいスライムだとか食べたなら毒だとか、そんなすつとぼけた事を考えていた僕の視線の先には、スライムが大量に詰まった巨大な砂時計のような真つ黒なオブジェが部屋の中央に鎮座していた。砂がさらさらと流れ落ちるのが砂時計なんだけど、目の前の砂時計の本身はスライム。どろりつちと流れ落ちるその様は見るものに嫌悪感を催して鳴りやまない。

そして件の砂時計の上部に記されている数字も気になる。この部屋に突入した時からずつと減り続けているその現在の数は「1000」……待った。減っている？

カウントが何に変動しているのかと思っていたら、目の前にいるスライムが少しづつ減っていた。部屋の中心部を注視してみると、スライムの間を奔る黒い影——クロの姿があった。

「良かった、まだ生きてる。生きてくれている……い！」

彼女の無事に内心安堵しつつ、考察を続ける。おかしいところはスライムが倒される瞬間と砂時計のカウントの動くタイミングがずれている事。ということは、考え出せるパターンはただ一つ。

「うわあ、この数相手に耐久戦……ってワケ？」

つまりは制限時間をめいっばい使った、大量のモンスターとの我慢比べ、RPGではよくある耐久戦ってわけだ。クリア条件が単純で理解しやすい分、達成するための過

程は困難なものになるのは間違いない、ってことなんだよね……

「こんな数、ソロじゃあとても……!」

リーファちゃんの言う通り、この数はソロでは確実に圧倒的な物量に飲み込まれてやられてしまうのが目に見える。けれど、あくまでソロであるならばの話。

「クロの事はやらせはしないさ。何故なら、僕たちが来た! からね?」

「はいはい、口を動かしてる暇があつたら、武器を構えなさいつての!」

「せめて決め台詞ぐらいビシツと決めさせてくれないかなリズウ!」

思いっきりツッコまれてしまったが、確かに彼女の言う通り今はそんなことを言う場合ではない。理由は単純。——僕たちの侵入を感知したのか、件のスライムが数体うぞうぞとこちらに向かってきたからだ。

「ナギさん、来ます!」

シリカちゃんの忠告と共に、スライムが僕に向つて突進を繰り出す。大質量を伴つたその一撃は、そこまで耐久に振つていない僕にはかなりの痛手を負わせる一撃に成りうるだろう。だけど、この世の中そうは甘くないんだよスライムくん。

「わかつているよシリカちゃん。——さて、君たちが僕らの邪魔をするというのなら、その存在有象無象、全部纏めて……薙ぎ、払うツ!!」

確固たる意思を手の中の得物に乗せて、僕は目の前の数匹を纏めて刈り取った。斬撃

と共に散らばり光の破片と化すスライム達。

ふむ。この程度の強さなら、『眼』や十八番の魔法を使うまでもないし、シキの手を借りるまでもない。この手の鎌だけで十分……！

というよりこういう輩は大抵魔法に耐性があるだろうしね。と言葉を心の内で紡ぎつつ、僕の攻撃が開戦の鎗矢となつて、戦いは始まった。

僕らが飛び入り参戦したのが目に入つたらしく、先ほどからスライムの大群と戦つていたクロもこちらに気づき、声を上げる。

「みんな、なぜ来たんですか!？」

「クロ、その話は後！ 各自散開して各個迎撃、そんなもつて僕とシリカでクロの所に突つ込むよ！」

「はいー！」

自身を囲むスライムに対応しながら、驚愕と怒りが混ぜこぜになつた口調の彼女をよそに、各々に向つてくるスライムを切り伏せていく僕たち。合間にシリカと視線を交わし、二人でクロの下へと駆け出していく。

斬つて、薙いで、跳ね飛ばす。僕らとクロの間に広がる隔絶を、斬撃の弾丸となつて突き進み。彼女の下へ。

「よっし着弾！ 待たせたねクロ！」

「お待たせしました、クロさん！」

クロと合流してからは周囲のスライムに対応するために、三人で背中合わせになって一丸となる。囲まれる形にはなったが、これなら大丈夫なはず。

「二人とも、私は一人で行くと言いまし——」

「ごめんなさい!!」

確認を取るクロの言葉を遮るようにシリカが声を張り上げる。予想だにしていなかったのか彼女の大声に虚を突かれ、クロは一瞬だけ固まり、眼前のスライムが攻撃する隙を作ってしまう。しかしすぐに冷静さを取り戻し、迫りくる相手を切り裂いた。

「ちゃんと聞いてたし、わかっているつもりです。だけど、それでも……それでもあたしは、クロさんを放っておけなかつたから」

シリカちゃんも同じく^{てきめん}靦面に迫るスライムに対処しながら言葉を続ける。彼女の得物の切っ先が閃き、ゼラチン状の身体をスパスパと切り刻んでいく。

「もしクロさんが何かを抱えているなら、あたしは力になりたいんです。クロさんが『キリトさん』の姿に似たのは多分、『キリトさん』の知り合いのあたしたちが力を貸すためだと思えますから！」

彼女が口にした理由は、理由としては余りにも無理やりで。だけどそんな理由でも。いや、そんな理由だからこそなんだろう。シリカちゃんの言葉にはどこか清々しいまで

の納得させる力があって。

視線の先にある小さな背中には、どこか懐かしい、だけでももう二度と見るこのできないはずの少女の姿が映っていて。——ああ、だからだったのか。あの時間を、あの彼女たち四人と過ごしていたあの短い時間を「心地よい」と思っていたんだ……!

「だけどシリカ、それは余計なお世話……」

そんな僕の思考をよそにして、シリカの言葉を受けてしばらく押し黙っていたものの、その言葉を払うように言うクロ。言わんとすることは分かるさ。お節介にも程があるだろうってね? だけど僕はシリカちゃんの背中に幻視した光景を思い出しながら口を挟む。

「クロ、こうなったシリカちゃんは多分止まらないよ」

「え……?」

「というより、今の彼女に似た女性を僕は知っていてさ。彼女も覚悟を決めたら梃子でも曲がらない人だったというか……それと、余計なお世話『だからこそ』だと思っようよ」

例え本当に余計なお世話であっても、「助けたい、力になりたい」という意思は、絶対に間違いないんじゃない。図らずもそれは、かつてのボクが抱いていた、気高く、強く、美しい理想そのもので。

「お節介は英雄の本質……そんな眩しいくらいの理想だからこそ、そうありたいとボク

は願い、それになるがために足掻いて、一度は折れてしまった……けれどそれでも理想は諦めきれなくて。その輝きに手をのばしたんだ……」

——最後の希望。僕が今でもなりたいと願う理想の終着点。あの剣の世界の、それも最前線で戦っていた彼女達は疑いようもなく、それを体現する者たちなんだろう。理想はまだまだ遠いなあ……

「——ふう、独り言はここまですてつと。さて、とりあえずこの状況を何とかしないとね……」

やれやれ、自分で言うのもなんだが戦闘中にこんな余計な事を考えてる場合ではないんだよね……悪い癖だ。目の前に迫るスライムは依然として減つてないわけだし。最初の時に比べてカウントはかなり減つてるからもう少しではあるんだけどね……!」

「——ああ、やつぱり。変わつてないなあ、君は」

ん？　なんかクロの表情が少し綻んだような……？　なんか言つたっけ僕。全然心当たりがないんだけど、どうしたんだろ——「つて、うわつと!?　危ないなあ全く!」
クロの様子が気になって、そちらに意識を傾けようとすると、その隙を突くようにスライムはこちらを攻撃してくる。ええい君たちスライムらしく粘着してくるなあ!?
さてはメンヘラつてやつだなおめーら!?

「というかクロ、今なんか言つた?」

「……いいや、何でもないよ。とにかくナギ、シリカ、ひとまず周りのこいつらを片付けて——フツ！」

「だあもう!? 話してる暇がない! ちよつとは息を整えさせろお!」

次々と襲い来るスライムに息をつく暇もないし、聞きたいことも聞けないし!

最初の時よりも荒つぽい鎌の一振りですライムを文字通り一掃するけど、数は視覚的に減っているようには見えなくて精神的にも追い詰められていく。いつになったら終わるんだ……!?!

「ピナ、回復を!」

「きゅい!」

「おお、ありがたい——つて、ああもうお礼を言う暇すらないとか、礼儀作法を知らないのか君たちは!?! 恥を知りなさい!?!」

いやまあ、スライムに礼儀作法なんてあったもんじゃないか……と、内心でセルフツツコミをしつつ、柄もなく口の悪いオカマジみた声を上げながら押し寄せる大量のスライムに悪戦苦闘していたら……

「きゃあああ!?!」と後方からリズの叫び声。

声色からしてピンチの模様だけど。ええい、一体何があったんだ……! 弾ける様にリズのほうに視線を向けるとそこには防具にダメージを負って太ももの肌色成分が一

部見えてしまつてるリズの姿が。

「何このスライム!? 酸を吐くの!? 防具の耐久値がく!?」

子細は分からないけど、スライムの攻撃を食らつて防具が溶けてしまつたらしい。これがラブコメだつたら云わばお約束のシーンなのだろうが、今は欲望よりも現実を直視みなければ。

リズに視界を向けると、僕のパッシブスキル「慧眼」による体力バーの視覚化で映し出された体力バーが黄色になつていた。つまりは注意域に差し掛かっている。あの攻撃、装備の耐久減少もそうだがダメージ自体も高いとか厄介な事この上ないね……?」

「リズさん!」

仲間のそんな状況に思わず声を上げるシリカちゃん。それを好機と見たスライムがシリカちゃんに攻撃を試みようとする。ええい奴ら、うまく隙を突きやがった、迎撃が間に合わない!」

「疾!」

だが、そんなことをクロが許すはずもないわけで。正直この鎌、範囲は広いけど攻撃間隔がちよつと長いのがネックだからなあ……助かったよ。

「クロさん……! ありがとう!」

「——シリカは左から、ナギは右から回り込んで敵を集めて。私が正面を受け持つ!」

「お、ようやくパーティ合流ってことかい、クロ？」

さつきまで頑なに一人で行くって言っていたクロの態度がちよつと軟化したので、からかうようにおどけて尋ねてみる。

「別にな一緒に行くって話じゃあない。とりあえず、このフロアは共闘するってだけの話だよ、まずはそれからだ」

「……うん！」

「ありや、すごいなあ……まあ共同戦線ってことで。それじゃあ、行こうかシリカちゃん！」

「はい！ クロさんも無茶はしないでくださいね！」

「……分かってる」

和らいだと思つた素振りがまた硬くなった——いや先程よりも強張っているように見えて、少々クロの事が気がかりではあるが、多分彼女なら大丈夫だろう。もしものは僕がいる。本気でやばくなったら……その時は未来の僕に任せる事において。

「——さて、始めようか……！」

「んもう、防具の耐久下げる攻撃なんてGM鬼畜すぎ！」

「しかもこの攻撃、最初に受けたからわかるけど、ダメージ量高いから蓄積するとヤバイ

わよ！」

「ホ、ホンモノのキリトさんが一緒じゃなくてよかった……！ いや、男の人のナギさんはいますけど……！」

ガールズ達の乙女な安堵も混ざった嘆きを右から左へ受け流しつつ、なんだかんだで時間が経過し、カウントも三桁を切るまで後少しというわけなのだが、正直状況は全く好転していない。

「正直、かなり持っていていかれてるね……結構キツイものがあるかも……！」
「くっ……！」

現在の状況は、慧眼で見た限りではクロが一番体力を減らしており、その次が僕、そこから三人が続いている。

僕も負担を請け負ってるおかげである程度はマシにはなっているが、やはり攻撃と対応を一身に請け負うクロの負担が一番デカいか……？

「早くクリアしないと、持たないかも……！」

シリカが目を向ける砂時計からスライムが出てきたが、肝心の中身は……え？ 思った以上に減ってる……？ というか今出たやつで最後!?

あの砂時計のカウントが切れるまで敵は無限沸きするかと思っただが、中身が有限だったの!?

「これで後は周りのスライムを倒すだけ……！」

リーファちゃんも口にしたとたん、クロが二刀の剣を構えて駆け出した。裂帛の気合と共に周りのスライムを薙ぎ倒していく。一気に全部倒す魂胆なのは予想できるが、動きにはいつもより精細さが欠けていた。

不味い、焦りすぎている……！ どうにかして彼女の頭に昇った血を下げないと——くっ、限りが見えてきたけど相変わらずスライムの攻め手は止まることを知らず、波のように押し寄せてきて援護に行けない……！

「ダメだよクロさん！ 急ぎ過ぎ——」

「これで、終わりだッ！」

悲痛なシリカちゃんの警告を無視して、クロはスライムをエフェクトの嵐へと変えていく。そうして、残りのスライムの数が三匹になった——その時だった。

地面に剣が激しくぶつかり、部屋に轟音が響き渡る。後ろからでは分からないが、攻撃を外してしまったのだろう。強打攻撃の技後硬直でクロの動きが止まり、待つてましたと言わんばかりにスライムがクロに牙を剥く。

「危ない——！」

動けないクロを庇うように、シリカちゃんが攻撃に割って入る。ボロボロでありながらも折れない姿は、僕に再び彼女の——「ロツサ」の姿を幻視させて。

——脳裏にかつての光景が蘇る。大切な存在を喪つてしまったあの悲劇の瞬間を。目の前で散つてしまった命の花を。もう二度と、もう二度と戻つてこない笑顔……あんなことを、あの絶望を——「繰り返しさせて、なるものかあ!」

走れ、走れ。今の僕がどうなつたつてかまわない、だけどあの悲しみは、あの絶望は、絶対に繰り返しちゃいけないんだ——!

「え、ナギさん!? うひゃあ!」

「これでいい——ぐうっ!」

ク口を庇つたシリカを押しつけて、降りかかるはずだった攻撃をこの身に受ける。防衛御値が心もとないし、防具にダメージを受けている今の僕の体力では、この攻撃でリメインライトになつてしまうのかもしれない。

けれど、かまうもんか。あの悲劇を再演させなかつたのなら。——それで、いいんだ。

「シリカ! ナギ!」

「二人とも大丈夫!」

事態に気づいたリズとリーファちゃんの二人が、僕に攻撃を加えたスライムを各々の得物で撃破し、此方に駆け寄つてきた。僕の事を心配してくれるのはありがたい、ありがたいんだけど……

「僕のことはいいいから、それよりも、突き飛ばしちやつたシリカちゃんを……」

さっき庇うときに押しつけたシリカちゃんは無事だろうか……彼女を探して辺りを見回してみれば——「あいたたた……もう、ナギさん凄い勢いで突き飛ばすんですから……」

声が出た方を見れば、部屋の片隅でシリカちゃんが突き飛ばされた衝撃で目を回していた。様子から見るとなんとか無事？ ではあるらしい。しかし緊急事態という事もあったが、悪いことをしてしまったな……

「というか僕、生きてる？」

今更になって気づいたが、どうやら僕も生き延びることができたようだ。……だが正直全然生還した実感が全くもってわかない。我ながら思うけど良く生き残れたな……？

幸運にも拾えた命に安堵しつつ、視界の左の僕自身のHPバーを見てみたら……

「残りHP、13……」

大アルカナでは「死神」を暗示する数字が示されていて。死神の二つ名を冠している身であるからなのか、どうやらこの数字とは切っても切れない縁というものはあるようだ……

「というより、動けない……攻撃の衝撃がここまで強いとは思わなかった……」

意識ははっきりとしているが、さっきの攻撃のせいかうまく身体が動かない……多分

すぐにましになるとは思うが。

「とりあえず、スライムはこれで最後かしら？」

「服とかHPとか結構危なかったけど、何とかかなりましたね！」

「というよりナギさん、大丈夫ですか!？」

「なんとかかね……体力は風前の灯火ではあるけども……つと、クロ、さつきはぶつかって
すまない——」

先刻シリカちゃんを庇った際にかんりの勢いでぶつかってしまったクロに詫びを入
れようと、なんとか彼女の方へ顔を向けてみると。

「——なんで」

「クロ……?」

「なんでっ! なんで私なんか庇ったの!？」

僕の瞳には、大粒の涙を流しながら、叫ぶように声を上げるクロが映っていて。

「ロツサが目の前でいなくなっただのに、あなたまでいなくなっただんじやあ、私は……!」

黒の剣士という仮面が剥がれ落ちた今の彼女は、絶望に打ちひしがれ泣きじゃくるた
だの一人の女の子で。

「もう二度と、あんな思いはしたくないの……私を置いて行かないで、一人にしないでよ

……『カーム』……」

彼女が継るように告げた、『カーム』という僕の本当の名前。それと僕と彼女だけが知る『ロツサ』という名前は、僕があの世界で残ってしまった罪を改めて思い出させてくれた。

「まさか、こんな形で再開することになるとは思わなかったよ、『ルクス』……」

僕が剣の世界に置き去りにしてしまった、たった一つの忘れ物。置き去りにしてはいけなかった、たった一つの願い。

——これは、思い出す物語、僕自身が忘れてしまった、大切な運命を思い出すための物語だ。